

VIEW21

ビュー21

2012

Vol. 4

中学版

特集

中学1年生の良さを伸ばす

インタビュー 国立音楽大教授 新藤久典

学校事例 大阪府大阪市立淡路中学校 / 島根県吉賀町立柿木中学校
茨城県日立市立多賀中学校

苦手な指導から逃げない、初任校での教えが出発点となった
鹿児島県長島町立獅子島中学校校長 祖母仁田政明

職務が増えても効率よく取り組み、生徒との時間を一番大切にする
東京都文京区立音羽中学校 穂田 剛

私を育てた
あの時代、あの出会い

ミドルリーダーの挑戦
——前へ! 前へ!!



特集

3 中学1年生の良さを伸ばす

4 課題整理

1年生の持ち味に目を向け、新生活への大きな期待に応える指導を

6 インタビュー

1年生だからこそ、自信を持たせ
集団としての団結力を高める

国立音楽大教授◎新藤久典



10 学校事例1

「憧れの先輩」の役割を持たせ
共に学び、高め合う姿勢を育てる

大阪府大阪市立淡路中学校

15 学校事例2

学習も行事も学年縦割りの活動で
1年生の意識を高める

島根県吉賀町立柿木中学校



20 学校事例3

自分や他者を「認める」指導で
生徒や学級集団の力を引き出す

茨城県日立市立多賀中学校

24 まとめ

中学1年生の良さを伸ばす指導に向けて

26 資料

成績伸長別に見る生活習慣や意識の違い

—「中学1年生の学習と生活に関する調査」結果から

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

苦手な指導から逃げない、初任校での教えが出発点となった

鹿児島県長島町立獅子島中学校校長◎祖母仁田政明

30 ミドルリーダーの挑戦 —前へ!前へ!!

職務が増えても効率よく取り組み
生徒との時間を一番大切にする

東京都文京区立音羽中学校◎穠田 剛

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

苦手な指導から逃げない 初任校での教えが出发点となった

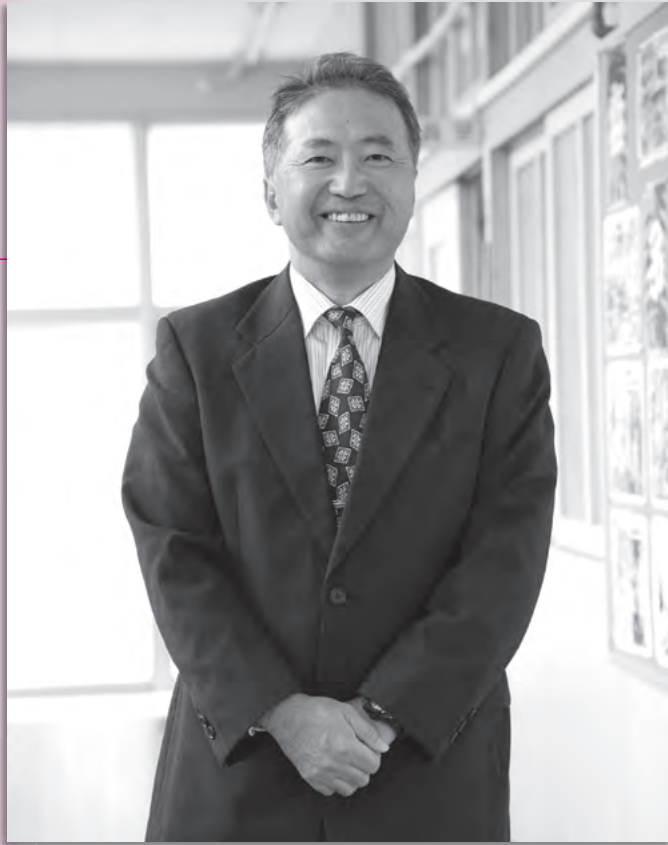
鹿児島県 長島町立獅子島中学校校長 祖母仁田政明
SOBONITA MASAKI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、祖母仁田校長が語る。

オルガン演奏経験のない 私を音楽主任に抜擢

初任校は愛知県の小学校でした。郷里の鹿児島で中学校教師になりました。かったのですが、採用試験に不合格。通信教育で小学校教員の免許を取得し、採用された愛知県で教師人生を始めたのです。ところが、うれしさもつかの間、大きな壁にぶち当たりました。私にはピアノやオルガンの演奏経験がなく、音楽の授業が全く出来なかったのです。困り果てた私は、音楽が専門で教務主任の勝哲夫先生に相談しました。

すると、1年間限定で、先生が私の代わりに音楽の授業をし、私が先生の学級で体育を教える交換授業をしていただくことになりました。その時、勝先生に指摘されたのは、オルガンの技術以上に、私の教師としての姿勢でした。「苦手なことを避けたり逃げたりする姿勢は、必ず子どもにも伝わる。そんな教育者が、子どもの可能性を本当に広げられるのか」。その言葉が胸に刺さりました。私は早速、携帯型電子オルガンを購入し、毎日練習しました。自分の演奏をテープに録音し、それを聞いてまずいところを何度も繰り返し練



そほにた・まさあき 専門教科は社会科。愛知県で教壇に立った後、郷里の鹿児島で勤務。伊仙町教育委員会、さつま町立求名小学校教頭などを経て、現職。外務省ODA民間モニターとして、カメルーンの学校を視察した経験もある。

1983 (昭和58)

愛知県西加茂郡
小原村立中部小学校に
新採で赴任

1987 (昭和62)

故郷・鹿児島県の
採用試験に合格。
加治木町立
錦江小学校に赴任

1989 (平成元)

山川町立山川中学校に
赴任。
社会教育主事を取得

1992 (平成4)

松山町教育委員会に
派遣社会教育主事
として赴任

1999 (平成11)

隼人町教育委員会
公民館文化係長に着任。
志学館大との連携講座
「隼人学」などを運営

2002 (平成14)

東市来町立美山小学校
に教頭として赴任

2009 (平成21)

長島町立獅子島中学校に
校長として赴任。
島内の学校の
小中一貫化に尽力する

習しました。更に、授業の進め方を学ぼうと、勝先生の音楽の授業を何度も見に行きました。

約束通り、2年目は自分で音楽の授業を行いました。最初は下手な伴奏をよく笑われました。学級にはピアノを習い、私よりはるかに上手な子どももいます。子どもや保護者に「Aちゃんに弾いてもらえば？」「B先生のクラスは上手だからうらやましい」と言われ、悔しい思いもしました。でも、自分がめげてはいけません。伴奏の機会を増やそうと、子どもたちに頼み、朝の会と帰りの会で歌を歌うことにしました。伴奏は相変わらずでしたが、子どもたちは次第に私の演奏に付き合ひ、楽しそうに歌ってくれるようになっていきました。

そして、3年目に入った時です。初めて、勝先生に「子どもの声がよく出ていましたね」と声を掛けていただきました。当時の私にとって、その一言が大きな自信になりました。そして、4年目になんと音楽主任に抜擢されたのです。

「立場が人を育てる」という言葉がありますが、音楽主任となった私がいまにそうでした。式典での伴奏を繰り返すうちにオルガンへの苦手

意識は消え、音楽の研究授業で高評価をいただいたことで自信が付きました。苦手と向き合う姿勢を教師が見せていくことが、教師と子どもの信頼関係につながり、学級経営にも生きる。郷里での採用がなかった2校目では、音楽で授業参観をし、歌を積極的に取り入れた学級づくりをするまでになっていました。

課題は誰にでもあり どう乗り越えるのが重要

苦手な指導があると、それはそのまま子どもに伝わり、成長の芽をつみ取ることになる——音楽を通じて学んだことは、3校目の中学校でも生きました。いわゆる荒れた学校で、特に道徳の授業がしづらい状況でした。しかし、中学生は自分の生き方や価値観を形成する時期です。情報を与え、考えさせなければだめだと考え、私は、当時人気のあった中学校を舞台にしたテレビ番組などの視聴覚教材を取り入れることにしました。学級全員で番組と一緒に見て、「この時の主人公の気持ちはどうだろう」と質問し、徹底的に考えさせたのです。内容が身近であり、映像で感情移入をしやすいためか、

「苦手な指導があることは 子どもの成長をつみ取ること」



生徒は考えを発表するようになりました。大変な状況であっても、教師が逃げずにきちんと授業をすれば、生徒は応えてくれるのです。

管理職として若手の先生を指導する立場となり、私は毎日授業を見に行くようにしています。指導で良かった点を見付け、「あの板書の仕方はノートに写すと、生徒の力になるね」など具体的に先生方を褒めるようにしています。かつての私がそうだったように、出来ないことは子

どもにすぐに見透かされ、そのままではだめなことは自分が一番分かっています。ですから、私は先生の努力を認めることに注力しています。

苦手は誰にでもあるものであり、重要なのはそれをどう乗り越え、自分の成長につなげるかです。自分で切り抜けられなければ真の力にはなりません。私が成長できたのは、失敗をも見守ってくれた先生方がいたからでした。私も役を任せ、温かな目で見つめていきたいと思えます。

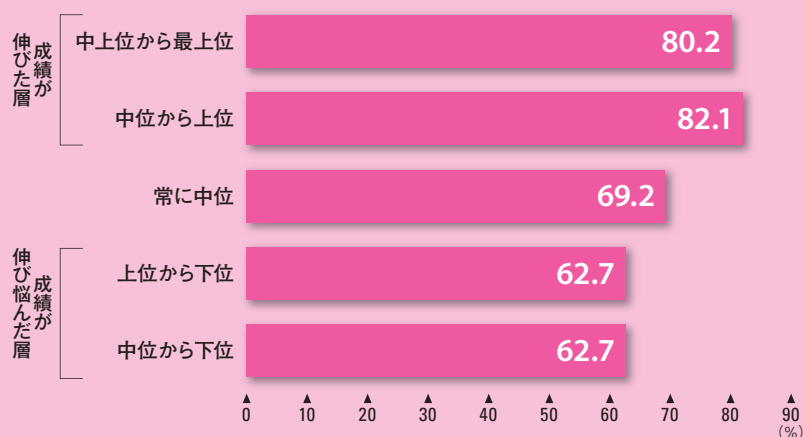
伸ばす 中学1年生の良さを

中学生としての基本的な生活習慣や学習規律を身に付けること、
自主的に考え行動する意識を持つこと、
これらを中学1年生のうちに定着させることが、
その後2年間の中学校生活の充実につながると考える教師は多い。
では、具体的にどのような最初の1年間を指導していくとよいのか。
「中学1年生の良さ」という点に着目し、指導の工夫を考える。

1年生で成績が伸びた生徒の8割が
自分のことを認めてくれる存在がいると回答

Q. 自分のことを認めてくれる学校の先生や友人がいる

(1年生1学期から1年生終了時までの成績変動別)



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
出典／Benesse 教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)
調査データの詳細は、P.26「資料」で掲載

1年生の持ち味に目を向け 新生活への大きな期待に応える指導を

入学直後に合宿などを通して、集団規律や家庭学習の仕方を指導し、中学生としての自覚を持たせようとする学校は多いだろう。初々しい1年生を、「中学生」にするためにどのように指導していけばよいのだろうか。課題と解決のヒントをまとめた。

中学1年生の現状と指導の課題

「VIEW21」読者モニターのアンケートより（2012年11月実施）

中学1年生の「良さ」

- ◎新生活への期待から、気持ちを切り替えているいろいろなことに挑戦しやすい
- ◎小学校からの継続で、グループ学習など活動的な学習に積極的に取り組みやすい
- ◎中学校生活への先入観や固定観念にとらわれずに、新しい取り組みに適応しやすい

中学1年生の課題

- ◎集団の中で相手の立場を考えた発言や責任を持った行動を取れない生徒がいる
- ◎小学校段階の基礎学力が定着していない生徒が目立つ
- ◎規則正しい生活リズムを築けていない
- ◎難しいことや嫌なことがあると、すぐに他人任せになる傾向が見られる

中学1年生への指導の課題

- ◎上級生と比較することで1年生を過小評価してしまい、教師が手を掛け過ぎてしまう
- ◎小学校段階の学習内容の遅れを出来る限り早く取り戻そうと、他教科の宿題の量を考えず、つい多くの課題を与えてしまう
- ◎早く中学生にしたいくて、生徒の実態を十分踏まえずに、規律指導を重視してしまう

中学1年生の良さを伸ばす

中学1年生を伸ばすヒント

理
論
編

○自己有用感を持たせる

小さなことでも褒める、役割を任せて成し遂げさせるなどして、「自分も出来る」と自信につなげる

○集団の良さを体験させる

行事やグループ学習にしっかり取り組ませることで、皆で協力する大切さや、集団の中での自分の居場所が分かる

○憧れとなる目標を提示する

2・3年生とのかかわりを通して、目標を持たせることが、学習や学校生活への動機付けとなる

▶ インタビュー 国立音楽大 新藤久典教授 P.6

実
践
編

小学生の中学校体験授業で支援役「リトルティーチャー」を任せる

- 憧れの存在としての自覚を持たせることで、学習意欲を育む
- 学校外の人との関係構築を通して、対話力や礼儀を身に付けさせる

▶ 学校事例1 大阪府大阪市立淡路中学校 P.10

小学校段階の復習と、学年縦割りで「自主学習ノート」に取り組む

- 学習面での自信を持たせるため、小学校の復習プリントに取り組ませる
- 「自主学習ノート」は3年生を回収役にし、1年生に家庭学習へ意識を向けさせる

▶ 学校事例2 島根県吉賀町立柿木中学校 P.15

1年生の学校行事は、学年生徒会で自ら運営させる

- 多くの生徒に役職を任せ、自立心を育み、他者を認める心も育てる
- リーダー育成と共に、他の生徒にはリーダーを支える重要性を体験させる

▶ 学校事例3 茨城県日立市立多賀中学校 P.20

1年生だからこそ、自信を持たせ 集団としての団結力を高める

国立音楽大教授 新藤久典

1年生を出来るだけ早く中学生にしたいという思いから、教師は規律指導に意識が偏る傾向がある。しかし、早期から型にはめる指導は、生徒の自信を失わせ、自立の機会を減じている面もある。1年生の良さを引き出し、自ら学ぶ集団をつくるには、何を心掛ければよいのか。全日本中学校長会会長を務めた経験のある、国立音楽大の新藤久典教授に指導のヒントを聞いた。

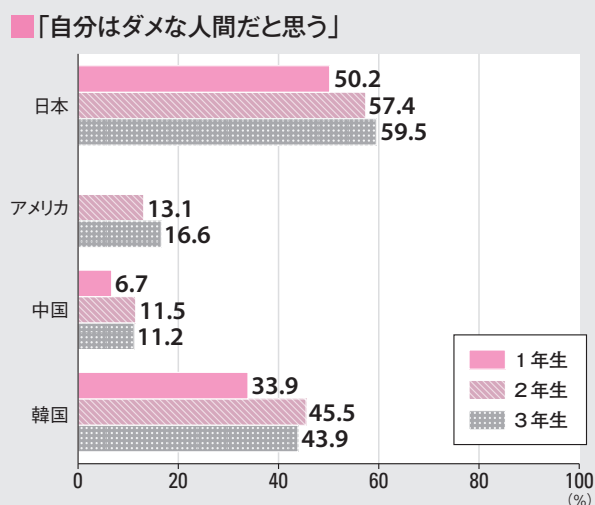
生徒の持つ力を認め 自己有用感と他者を信頼する心を育む

先生方の中には、1年生を受け持った時に、生徒が幼いと感じたことがある方も多いのではないのでしょうか。中学校では1年生から3年生まで持ち上がり、卒業させた後に再び1年生を受け持つのが一般的です。1年生の発達段階を理解していても、つい送り出したばかりの卒業生と比べてしまうために、1年生の出来ない部分や足りない部分ばかりが気になってしまいます。そこで、1年生を受け持つ教師には、生徒のマイナス面を見るのではなく、生徒が持つ能力や集団としての力を認

め、最大限に生かした指導をするという意識を強く持つことが重要になります。

生徒の中学校に対する期待と、教師の思いの間にギャップがあることも課題です。1年生は、新しい環境に対して不安を抱えています。それ以上に「中学校では変わった」という期待を抱いています。教師が1年生のそうした思いをしっかりと受け止め、期待に見合うものを提供できれば、生徒は「中学校に来てよ

図 中学生の自信の度合い 4か国の比較



注1) 数値は「そう思う」+「まあ思う」の%

注2) サンプル数は日本807人、アメリカ852人、中国1001人、韓国1133人

注3) アメリカは中学2年生、3年生のサンプルのみで構成。学校通して調査票を配布し、回収。日本の中学生は4か国の比較で、特に自己否定感が強く、また学年が上がるにつれてその数値が上昇している

出典/日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識」日本・アメリカ・中国・韓国の比較 (2009年2月)

中学1年生の良さを伸ばす



しんどう・ひさのり◎東京都公立中学校教諭、東京都教育庁指導部中学校教育指導課指導主事、東京都東村山市教育委員会指導室長、東京都新宿区立新宿西戸山中学校校長などを経て、現職。中央教育審議会委員、全日本中学校長会会長なども歴任。専門教科は国語。

かった」「この学校でよかった」と思えるはずです。

しかし、実際には、生徒の期待に的確に答えられていない場合が少なくありません。むしろ、生徒を出来るだけ早く自校の校風になじませよう、中学生としての自覚を植え付けようと指導するため、生徒は自分の期待との間にギャップを感じ、失望感や無力感を味わうこととなります。

中学生の意識調査を見ると、学年が上がるにつれて自信を失っていく生徒が多いという結果がしばしば見られます(図)。

では、中学校を卒業するまでに、生徒がどのような力や姿勢を身に付けていけばよいの

でしょうか。私は、全ての生徒が「自分には出来る」という「自己有用感」を持って卒業することが、何よりも大切だと考えています。「出来る」という自信があれば、困難にぶつかっても、くじけることなく乗り越えられると思うからです。

もう1つ大切なのは、個人では出来ないけれども集団であれば出来るという体験をして、他者を信頼する心を持つことです。仲間と一緒に成し遂げたという感動は、たとえ自分1人では難しくても、みんなと力を合わせてやり遂げようという強い意志をつくり、仲間を信頼することにつながるでしょう。そうした雰囲気があれば、学級集団としての規範

意識や団結力が高まります。そうした経験は、高校や大学、社会に出た後も必ず役に立つはずです。

教えたい気持ちを抑え 生徒の主体性を引き出す

入学してきた生徒の期待を生かしつつ、自己有用感や信頼する心を育むには、どのような指導が必要なのでしょうか。何よりも大切なのは、生徒が主体的に活動し、持てる力を最大限に発揮できる場を用意することです。

私が以前勤めていた中学校では、入学直後に2泊3日で移動教室を行っていました。教師は、入学したばかりの生徒に実行委員、学級委員、班長などを決めさせて、スケジュールを示すところまで指導し、当日は全て生徒が中心になって活動を進めます。

生徒は、最初、何か分からないことがあるとすぐ教師に質問してきますが、教師は「私は『しおり』ではありません」と言って自分たちで考えるように促します。その後も困ったことが起こる度に、何か言ってくれるのではないかと教師の顔をうかがうのですが、教師は一切、何も言わないのです。

そうすると、面白いことに、生徒は「学校の先生は全然当てにならない。自分たちが頑張らないといけない」と言うようになりま

す。そして、生徒が自分たちで相談しながら動く姿が、次第に増えていきます。そうなる

と、教師にとつては「しめたもの」です。

生徒が右往左往していると、教師はつい「それをしてはいけない」「もっと良い方法がある」などと教えたくなります。しかし、そうしたくなるのをぐっと我慢し、生徒が自分です。自分で考えて主体的に取り組む姿勢、失敗を恐れずに一歩を踏み出す勇気を持たせることが、1年生の指導では何よりも大切なことです。

20以上の心の底からの褒め言葉を持つべき

小学校時代に自分たちが身に付けてきた能力の素晴らしさに気付かせることも、1年生の自信を高めるために欠かせません。最も効果的な方法は、やはり「褒める」ことです。

以前、海外から視察に訪れた教育関係者に「日本の先生方は教え方は上手ですが、褒め言葉を知らないですね」と指摘されたことがあります。確かに、欧米の教師は、生徒が教師の質問に答えたり、教師に質問したりした時には、まず「サンキュー」と言います。ところが、日本の中学校の教師は子どもに対してそうした言葉を言うことはほとんどなく、逆に「こんなことも覚えていないのか」というような厳しい言葉を投げ掛けることもしばしばあります。

1年生を受け持つ先生は、少なくとも20以

上の「心の底からの褒め言葉」を持つべきだと思います。生徒が「先生は自分を認めてくれている。自分はその力を更に伸ばすために授業を受けている」と思えば、授業を受ける姿勢も違ってくるのではないのでしょうか。

学活も、「今朝、A君がごみ拾いをしてくれました。みんなでお礼を言おう」などと褒め言葉から始め、それから「言いたくはないけれども……」と注意事項を伝えれば、生徒も聞く耳を持つでしょう。機会を捉えて、事あるごとに生徒を「認める」言葉を繰り返して投げ掛けることが大切なのです。

集団活動でリーダーシップとフォロワーシップを学ぶ

集団の大切さを知るためには、リーダーを中心に団結して物事を成し遂げる経験を、1年生から具体的な活動を通してさせることが大切です。

ただし、リーダー1人に重荷を背負わせるのは禁物です。リーダーになった生徒は、クラスのみならず頼られてうれしい半面、経験したことがないような戸惑いやプレッシャーにさいなまれることもあります。そうした時に大切なのは、成長途中のリーダーでも、みんなで団結して取り組めば物事が成し遂げられるということ、全ての生徒に感じさせることです。リーダーだけに頼るのではなく、みんなで支え合って物事に取り組む（フォロ

ワーシップ）中で、生徒はリーダーの大変さやリーダーシップの持つ意味を理解でき、フォロワーシップの大切さを学ぶのです。

そうした体験を積ませるためには、出来るだけ多くの行事やグループ活動を経験させ、リーダーシップを発揮する場面、フォロワーシップがないと失敗するという場面を多く用意するとよいでしょう。出来る限り多くの生徒に両方の立場を経験させることで、1人の意識の欠如がいかに団結を揺るがせたり、全体の成果に影響を与えたりするかを実感できるでしょう。誰か任せではなく、一人ひとりが主体的に参加することの重要性を1年生から伝えていくことが大切です。

異学年との交流で刺激を与え生徒自らが高め合う関係に

異年齢集団との交流も、生徒にさまざまな気付きを促します。例えば、地元の小学生と交流することで、1年生が自信を付けることもあると思います。以前の赴任校の隣には小学校があり、よく小学生が中学校の校庭をのぞいて、体育の授業や部活動の様子を見ていました。生徒は小学生にいいところを見せようとして張り切り、競技のタイムや成績がぐんと伸びることもありました。加えて、直接、1年生が小学生に指導する場面があれば、なおさら中学生の自信は深まったと思います。外部との連携が難しいようなら、校内にお

中学1年生の良さを伸ばす

ける異学年交流でも十分学ぶことはあります。「今の3年生はすごいぞ」と言って期待感を持たせて、授業や行事などを参観させれば、1年生には大きな刺激になるはずです。一方、下級生が目を輝かせて自分たちの活動を見てくれれば、3年生には緊張感が生まれ、頑張ろうと意欲が湧いてきます。また、3年生に1年生の合唱コンクールや体育祭の指導を任せるといいうように、上級生から直接指導を受ける場面をつくるのもよいでしょう。

このように、異学年交流はさまざまな面で利点がありますが、学校の活動は学年ごとに行うことが多いため、他学年が何をしているのか分からないことが少なくありません。1〜3年生の学年主任が情報交換をしながら方向性を共有し、互いを生かし合える関係を築くことが大切です。そのためには、管理職が学校全体の状況を見ながら、学年間の意思疎通を促すことが必要になるでしょう。

異学年交流が活発となり、互いに刺激し合うようになれば、やがてそれは学校の文化にもなっていくきます。先生は生徒たちの互いに学び高め合う力を信じて、主体性を引き出していくことが、自律的に学ぶ集団をつくるのではないのでしょうか。

目先の成果にとらわれず 3年間を見通した指導を

1年生の段階では、学習が遅れている生徒

を支援するのに手一杯で、行事ばかりに力を入れられないかもしれません。しかし、私は、行事も教科学習も含めて、3年間をトータルで考える視点を持ち、指導を組み立てていくべきだと考えています。卒業時にはここまで力を身に付けさせたいという目標をしっかりと描いた上で、3年間を見通しためりはりのある指導を行うことが大切です。

少し回り道をしているように見えても、最初は、生徒一人ひとりに自信を持たせる場面や、集団としての規範意識や団結力を高めるための時間を多めに取り、生徒の自己有用感を出るだけ高めめる。それがうまくいき、クラスがまとまってから学習に集中させても遅くはないと思います。学習に取り組む姿勢が定着してきたら、再び行事などに力を入れ、一段高いレベルの規範意識や団結力を生徒に求め、それが成功して自信が付いたら、次に進むのです。

生徒に、やるべき時はやるという姿勢や、いざ勉強という時に耐えられるだけの体力と気力が育っていないうちから一方的に学習に取り組ませても、すぐに息切れしてしまい、自信を失ってしまいます。2年生になって、中だるみと共にクラスがばらばらになってしまいう可能性もあります。

こうした方法は、保護者から学習の遅れを指摘されるかもしれませんが。しかし、私はそういう保護者にはいつも「3年生を見てくだ

さい」と伝えていました。指導を受けた結果である3年生の姿を見せることで、1年生の保護者にも安心していただけるのではないのでしょうか。

見通しを持った指導は、一部の教師の意識だけではうまく出来ません。管理職が方針を明確に示し、学校全体で進めていかなければ難しいと思います。管理職が3年計画で進めていく写真をしつかり示せば、1年生の最初の方で学習が多少遅れたとしても、先生方は動じず、目標に向かって一致団結して指導に取り組めるのではないのでしょうか。管理職の先生方には目先の成果にとらわれず、自分が責任を取るというくらいにの気概を持って、リーダーシップを発揮していただき、1年生を大きく育ててほしいと思います。

1年生の力を引き出す指導のポイント

- 活動は、生徒に任せ、教師は見守る
- 生徒をまず褒めて認め、課題はその後にプラスアルファとして提示する
- 学習でも行事でも、1人では達成が困難な課題に集団で取り組ませ、生徒間の信頼関係を醸成する
- 異学年の交流で、学校生活での目標を提示すると共に刺激を与える
- 3年間を見通しためりはりのある指導をする

「憧れの先輩」の役割を持たせ 共に学び、高め合う姿勢を育てる

大阪府 大阪市立淡路中学校

大阪市立淡路中学校では、1年生が校区の小学5年生の体験授業を支援する「リトルティーチャー」を行う。「憧れの先輩」という縦の関係を通して、中学生としての自覚を高めると共に、生徒同士の横のつながりも深めながら、学ぶ意欲を1年生段階から伸ばそうとしている。

●課題

将来への展望を 生徒たちに持たせたい

大阪市立淡路中学校の校区には、地域ぐるみで子どもを育てようという気風が色濃くある。1969年には、同校がいわゆる荒れた状態になったことに対応しようと、地域に「淡中をよくする会」が発足した。町内会や社会福祉協議会などから成るこの組織は、その後、同校と校区の2つの小学校を支える「淡路地域教育協議会」(AWAKYO)に発展し、今もボランティアやイベントなどを活発に続

けている。地域には経済的に厳しい家庭も多く、子育てや家庭学習のさせ方が分からないと相談に来る保護者もいるという。

こうした状況の中、多くの生徒が直面している課題は主に2つある。1つは、基礎学力の不足。もう1つは、将来の展望を描けていない点だ。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の同校の結果を見ても、自分を大事に思う自尊感情が高いにもかかわらず、将来に希望を持つている生徒は少ないという。また、卒業生が高校進学後、約1割が中退してしまふという現状にも危機感を抱いていると、盛岡栄市教頭は話す。

School Data

◎1947(昭和22)年開校。新大阪駅から1.5キロほどの都市部に位置する。教育目標は「表現力豊かな人材の育成」。2012年度は言語活動の充実を研究テーマに掲げている。



校長◎高橋哲也先生

生徒数◎303人 学級数◎12学級(うち特別支援学級3)

所在地◎〒533-0031 大阪府大阪市東淀川区西淡路4-25-53

TEL◎06-6322-4401

URL◎<http://www.ocec.ne.jp/jh/awaji-jh/>

公開研究会◎未定

「どのように生きていけばよいのか、どうすれば社会の役に立てるのか、どんな職業に就きたいのか、展望を持ってない生徒が多く見受けられます。ところが、そういう生徒たちも、小学校の卒業式では『消防士になりたい』『サッカー選手になりたい』といった夢を語っていました。現実を見つめるのは大切なことですが、中学校で生徒の希望をつぶしてしまっている面もあるのではないかと。それは、私たちの課題だと思います。本校は人権教育を長年続けており、『人の心の痛みに分かる人間を育てる』が教育方針の大前提にあります。仲間づくりをした上で、将来を自分

中学1年生の良さを伸ばす

の力で切り開いていける力を身に付けさせたいと考えています」

1年生の段階で重視するのは、人と人がつながるためのコミュニケーション能力の育成だ。人権教育担当の林剛史先生は、次のように説明する。

「将来どのような職業に就いても、人とかわりながら働いていく力は不可欠です。社会に出てから生かせるようなコミュニケーション能力を付けさせたいと考えています」

●活動の工夫①

小学生の中学校体験で1年生をサポート役にする

同校の地域では、以前に高校生が小学生や中学生の学習支援をする活動を行っており、「やる気につながった」「テストの点が上がった」という体験を覚えている保護者がいる。12年前に同校に赴任した林先生は、そうした話を聞き「同じような活動を復活させられないか」と考えていた。2007年度から3年間、文部科学省「人権教育総合推進地域事業」に指定されたことをきっかけに、校区の2つの小学校を交えた具体的な検討に入った。

当時、小学校では「あこがれの継承」という取り組みを行っていた。例えば、遅刻をしがちな小学6年生に運動会の応援団長を任せ、運動会当日まで遅刻をしないようにするなど、自分の生活改善を促し、「ああいう先

輩になろう」と下級生に言われる存在を目指させるものだ。

「中学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんはすごい」と言われるためには、服装や言葉遣いもきちんとしなければなりません。『あこがれの継承』を中学校でも引き継ぎ、1年生を小学生にとつての憧れの存在にしたいと考えました（林先生）

「1年生は、3月31日までは小学校の最上級生として、下級生からいつも頼られる存在でした。ところが、4月1日になった途端に一番下の学年になり、上級生から面倒を見られる立場になります。それは、高校や大学進学時、そして、社会に出る時にも同じように経験することです。ですから、集団の中で一番下の存在となった時、どのように自分の立場を捉え、前向きに自分の生き方を考えていくのか。そうした経験も積ませたいと考えました」（盛岡教頭）

このような課題意識から、4年前に始めたのが「リトルティーチャー」だ。小学5年生を対象にした中学校の体験授業に、中学1年生をサポート役として入る取り組みだ。中学1年生と小学6年生では学力差が小さく、憧れの気持ちが高まらないと考え、あえて小学5年生を対象とした。

取り組みの特徴は、体験授業当日だけでなく、当日に向けて準備を重ねていく数カ月間にわたるプログラムになっていることだ



大阪府立淡路中学校校長
高橋哲也 たかはし・てつや
「生徒一人ひとりの強みを伸ばしていくために、先生方の強みを生かせる職場づくりを大事にしたい」



大阪府立淡路中学校教頭
盛岡栄市 もりおか・えいいち
「人と人との出会い、一期一会を大切にしてほしい。人の心の痛みが分かる人になってほしい」



大阪府立淡路中学校
林剛史 はやし・たけし
人権教育担当。「生徒との人間関係を築いた上で、厳しさの中に優しさのある指導を心掛けたい」

（P.12図1）。学級活動や道徳、「総合的な学習の時間」を利用し、コミュニケーションの仕方を学び、小学生との交流会の内容を考え、当日の運営も行う。

●活動の工夫②

言われてうれしい言葉探しで生徒同士のつながりを豊かに

小学5年生の体験授業は例年2月に行われ、1年生への事前指導は11月に始まる。まずは、上手な話の聴き方など、スムーズなコミュニケーションを図るための技能を学ぶ。この過程で生徒たちの仲間意識も高まっていくと、高橋哲也校長は説明する。

「本校は以前、荒れから立ち直る過程で築いてきた『仲間づくり』を脈々と受け継いで

図1 「リトルティーチャー」の全体計画(2011年度)

全体計画	
夏休み	実施計画の作成(学年集団)
9月	学年集会での動機付け ・AWAKYOカーニバルでの託児所開設に向けて
10月	保育所へのあいさつ訪問 ・交流会、託児所開設に向けた動機付け ・交流会に向けた企画書づくり ①リレーションづくり ②上手な話の聴き方
11月	④保育所交流活動 ⑤サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う ・改善するところを出し合う ③おいしい言葉(1) ④上手な質問の仕方 ⑥託児所開設に向けて考える ⑦託児所開設(保育活動) ⑧サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところは?・改善するところは?
12月	⑤おいしい言葉(2) ⑥一方通行のコミュニケーション 学習支援したい教科のアンケート調査
1月	学習支援する教科の発表 ⑦各教科メンバーのリレーションづくり ⑧交流会の内容をプランニングする ⑨小学生との交流会(1) ・担当する学級の児童と交流する ⑩サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う ・改善するところを出し合う
2月	⑩小学生との交流会(2) ・担当する学級との昼食交流と交流活動 ⑪サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う・改善するところを出し合う ⑫学習サポートについて ・白熊の生態 ⑬学習支援内容をプランニングする ⑭学習支援のロールプレイと改善 ⑮小学生への学習支援「リトルティーチャー」 ⑯まとめと今後の自分づくり
3月	教育指導計画の年度末反省で総括

次の4つのマークは、図2のピア・サポートプログラムの概念と一致する
 ①…トレーニング ②…プランニング ③…サポート活動 ④…スーパービジョン
 *同校の資料を基に編集部で作成

図2 ピア・サポートのプログラムから見た各活動の位置付け

トレーニング	プランニング	サポート活動	スーパービジョン
サポート活動に必要なスキルを学ぶため、疑似体験をする	サポート活動を行うための、計画を立てる	実際に対象者を支援する	活動を振り返り、問題点を見付けると共に、次への解決法を考える
1 道徳・学活 ・各教科メンバーのリレーションづくり ・上手な話の聴き方 ・おいしい言葉(1)(2) ・上手な質問の仕方	2 総合・道徳 ・小学生との交流会(1)に向けて	3 総合 ・小学生との交流会(1)	4 総合 ・サポートを振り返り、練習する
5 道徳 ・一方通行のコミュニケーション ・学習サポートについて(白熊の生態)	6 総合 ・小学生との交流会(2)に向けて	7 総合 ・小学生との交流会(2)	8 総合 ・サポートを振り返り、練習する
9 学活・道徳 ・学習支援内容をプランニングする	10 総合 ・小学生への学習支援「リトルティーチャー」	11 総合 ・まとめと今後の自分づくり	

*同校の資料を基に編集部で作成

きています。しかしここ数年、それが希薄と
 なっているのではないかとという危機感があり
 ました。そこで、仲間同士で支え合うピア・
 サポートの概念を再び取り入れ、積極的に生
 徒同士をつないでいこうと考えたのです(図
 2)。信頼している仲間に自分は認められて
 いるという実感を持てれば、授業中でも間違
 いを恐れずに自発的に発言できます。安心し
 て学べる環境をつくるのが、学力向上にも
 つながると考えました」
 コミュニケーション能力を身に付けるため
 の1つが、「おいしい言葉」という授業だ。
 「今の中学生は、『うざい』とか『死ぬ』と
 いった言葉を簡単に口にします。そうした相

手を傷付ける言葉が、コミュニケーションを
 阻害することに気付いていないのです。そこ
 で、言われてうれしい言葉は何かを考える授
 業を設けました」(林先生)
 授業では、「おいしい言葉」というテーマ
 で褒められたと感じる言葉を、まずグルー
 プで挙げ、黒板に書き出し、学級全員が投票す
 る。すると、「ありがとう」の得票が最も多
 いという。
 「大人も普段の生活で『ありがとう』と言
 うのを省略しがちです。相手の言葉に耳を傾
 けた上で『ありがとう』がきちんと言えれば、
 人間関係がより豊かに、つながりがより強く
 なっていくはずですよ」(高橋校長)

授業だけではなく、普段の学校生活でも言
 葉遣いを振り返らせている。
 「これ、何なん?」
 生徒からそう問いつけられた時、林先生は
 あえて答えなかつたり、生徒が言った言葉を
 そのまま繰り返したりする。すると、生徒は
 誤りに気付き、「これは何ですか」と言い直
 すようになるという。
 「その時、私は生徒に『お兄ちゃん、お姉
 ちゃんとして小学校に行くことになるのだか
 ら、そんな言葉遣いをしていたら、中学生な

中学1年生の良さを伸ばす

「そんなもんだと思われてしまうよ」と伝えていきます。リトルティーチャーのような活動をしたからといって、生徒がすぐに変わるわけではありません。言葉遣いがきちんとしていない場面があったら、その都度、教師が声掛けをするようにしています」（林先生）

●活動の工夫③

分らない経験をさせて分らない人の気持ちを感じる

事前指導では、「白熊の生態」というサイコロを使った遊びなどをして、「分らない」「出来ない」という気持ちを押し量る経験もさせた。

この遊びでは、サイコロの目が5の時、真ん中の点が餌で、周りの4つの点が白熊であり、サイコロの目が2の時は餌がなくて白熊が2頭という法則を見つけ出すことが答えとなる。学力に関係なく、隠れた法則を見つけ出せば答えられる問題だ。すると、定期考査では高い点数を取っている生徒でも、答えが分からずにイライラする場合がある。これこそ、教師が意図するところだ。学習の出来る生徒が、この体験を通して、「分らないから、あの子は授業中にイライラしたりしゃべったりするんだ。分らないければ授業は面白くないもんな」と、分らない生徒の気持ちを理解するように促す。これは、年下の小学生に教えるための準備であると同時に、同級生へ

のまなざしを変えていく仕組みにもなっている。

●活動の成果

小学生の「また来てな！」が生徒の学習意欲に結び付く

リトルティーチャーの本番前には、中学1年生が小学校に向き、小学5年生との交流会を2回、開く。リトルティーチャーは国語、社会、数学、理科、英語、体育、美術で行われ、中学1年生も小学5年生もいずれか1教科に参加する。交流会は教科単位で行い、互いを知っておくことをねらいとしている。交流会で行うことも、生徒が考え、会も進行する。「また来てな！」



写真 「リトルティーチャー」当日の様子。中学校を訪れた小学5年生に、中学1年生が丁寧に学習を教える。つまづいた児童がいると、生徒が駆け寄り声を掛ける姿が見られた

「中学校での授業を楽しみにしています」交流会で小学5年生や小学校の先生からそうした言葉を掛けられることが、生徒にとって強い動機付けになっていく。

こうした過程を経て、2月にリトルティーチャーの本番を迎える。本番では、普段の指導に困り、事前の小学生との交流会は抜け出していた生徒が、英語の授業で小学生と一緒に身振り手振りを交えた表現に参加していたり、普段は態度がおうへいな生徒が、小学生に丁寧な根気よく教えたりする姿が見られるという。

他にも、リトルティーチャーは生徒に変化をもたらしている。

「先生、最近、Aが『Do You Have?』何やねん」とか英語について聞いてくる」と、ある生徒が林先生に言ってきた。どうやら、成績の良いその生徒に、Aは授業で分らないことを質問していたようだ。

「それまで学習意欲の低かった生徒が、リトルティーチャーの準備をきつかけに、友だちを頼って復習するようになっていました。小学5年生に教えられるかどうか不安であり、答えられなかったら恥ずかしいという思いがあるのでしよう。リトルティーチャーは、これまで接点の少なかった同級生との横の関係も深めているようです」（林先生）

また、不登校気味で、5、6時間目に行うリトルティーチャーの準備を休みがちだった

Bは、交流会で知り合った2人の小学生から「Bちゃん、Bちゃん」「また来てな」と慕われるようになった。すると、交流会の振り返りシートに「絶対に次も行くから待ってね」と書いていた。

「自分の気持ちをうまく伝えられず、人間関係を築くのがやや苦手でしたが、小学生とのかかわりを通して、自分の居場所を見つけたのでしよう。今までにない自信を持った表情で話をする姿が見られるようになりました。Bは、1年生では早退がとでも多かったのですが、3年生までに格段に減っていきました。異学年の縦のつながりが、自分の姿を変える1つのきっかけになったのかもしれない」(林先生)

また、林先生は、「**Fighting Saturday**」という取り組みでの生徒たちの教え方も年々上手になっていくという。これは、校区の小学5・6年生が同校の部活動に体験入部をするもので、6、12、3月の年3回行っている。希望者のみの参加だが、小学5・6年生の約半数の100人が毎回参加する。

6月の時点では3年生が現役で所属しているため、1年生の出番は少ないが、3年生が引退した12月と3月では、1年生が小学生とかわる場面が増えてくる。顧問は出来るだけ部員に活動内容を考えさせるようにしており、こうした場でも、生徒のコミュニケーション能力が上達しているという。

●今後の課題

1年生で身に付けたスキルを リーダー育成や地域交流につなげる

同校では、1年生での取り組みを踏まえて、2年生、3年生の活動へどのようなにつなげているのか。1つはリーダーの育成だ。

「以前は自然と学級のリーダーが出てくるものでしたが、今は手を掛けないと出てこなくなりしました。グループで遊ぶ機会が減ったのが原因かもしれません。学校が意図的にリーダーを育てていく必要があると考えています」(林先生)

リーダーの資質がある生徒には、リトルティーチャーの活動で司会などを務めるように仕向ける。それが、2年生、3年生になった時、後輩をまとめていく力につながっていくという。

2つめは世代を超えた人間関係の構築だ。1年生でリトルティーチャーを通して小学生や同級生とのつながりを深め、2年生では地域の人々との接点を重視する。例えば、「AWAKYOKARINIBAL」というAWAKYO主催のイベントで模擬店を出店する。そこでは、事前に商店街に立ってマーケティングのためのアンケートを実施したり、商品を仕入れる業者に出向いて商品の扱い方の指導を受けたりしながら、地域の人たちに鍛えてもらっている。3年生では2泊の民泊体験で農

家と交流する。更に、コミュニケーションの幅を外へと広げていくためだ。

12年度は「ようこそ先輩」と題し、高校2年生になった卒業生を中学校に招待し、中学2年生に高校での体験を話してもらった。

「大人になって子育ての悩みが出てきた時などに、地域の先輩に聞けるというような関係を築いてほしいと考えています。もっと大きく言えば、リトルティーチャーを地域の再生にもつなげていけるような活動に出来るよう頑張っていきたいと思います」(林先生)

高橋校長が考える1年生に大切な指導

生徒を取り巻く環境が変われば、生徒の育ちも変わります。大事なことは、これまでの経験と共に、目の前の生徒を取り巻く環境や背景を踏まえながら、教師全員で丁寧に指導に当たることです。

そうした中で先生方に強調しているのは、忙しい日常にあっても教科指導力を高めることです。私も、出来る限り若手の先生方と教科指導について意見交換できる時間を持つようにしています。月並みで地道ではありますが、「わかる授業」づくりが生徒の安心と落ち着きにつながると考えています。

学習も行事も学年縦割りの活動で1年生の意識を高める

島根県 吉賀町立柿木中学校

全校生徒39人の吉賀町立柿木中学校では、小規模校の特性を生かし、生徒の主体的に学ぶ態度、基礎学力の定着を図る。自学自習の習慣付け、先輩との縦割り活動などで、学ぶ意欲や自信を付けさせ、地域でも高い学力を維持している。

課題

主体的に学びに向かう姿勢や挑戦する意欲を育てたい

島根県の西端にある吉賀町は、日本有数の清流、高津川をはじめとする豊かな自然に囲まれた山あいの町だ。中でも、柿木地区は有機農業の里として全国に知られる。吉賀町立柿木中学校は同地区唯一の中学校で、生徒は全員、隣接する柿木小学校から入学する。2012年度の生徒数は3学年計39人、うち1年生が11人の小規模校だ。12年度に赴任した常國芳文校長は、生徒と

地域の様子について次のように語る。

「本校の生徒は総じて素直で純朴です。生徒は地域の方々の温かいまなざしに見守られながら、落ち着いて生活しており、それが基礎学力の土台にもなっていると感じます」

学力も全体的に高く、特に現2年生は、3年前に始まった吉賀町内4校の統一テストで多くの生徒が上位に入る好成績を収めた。この背景には、隣接する柿木小学校の手厚い指導も影響しているという。

「年度ごとに学力差はあり、中には学習習慣が定着していない生徒も見られますが、ほとんどの生徒がきちんと前を向いて授業を受

School Data

◎1947(昭和22)年開校。あいさつができ、自ら学びに向かい、人との共生を図る生徒の育成を目指す。2005年から2年間、文部科学省の人権教育研究校の指定を受ける。河川水泳やしめ縄作りなど自然や文化に密着した教育を展開。



校長◎常國芳文先生

生徒数◎39人 学級数◎4学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒699-5301 島根県鹿足郡吉賀町柿木村柿木 682-1

TEL◎0856-79-2027

URL◎<http://www.iwami.or.jp/kaki-jhs/>

公開研究会◎未定

ける、しっかり聞くとといった基本的な学習習慣を身に付けて入学してきます。小学校の指導の影響が大きいと感じます」(常國校長) 一方、常國校長が課題として挙げるのは、生徒の更なる主体性の育成だ。

「主体的に学びに向かおうとする姿勢や自ら新たなことに挑戦しようとする意欲は、まだ足りないと考えています」

同校では、生徒の主体的な学びの姿勢を培い学力向上を実現するために、次の4点を重視している。①自信を付けさせる指導、②徹底した学習習慣の確立、③学年縦割りの活動による主体性の涵養、④学校全体で取り組む

生徒・教師の意識の醸成である。次からそれぞれ
の取り組みについて見ていく。

● 自信を付けさせる指導

徹底した復習で基礎学力を定着させ 1年生に自信を持たせる

学習に前向きに取り組むための原動力の1つとなるのは、「自分にも出来る」という自信だ。同校においても、1年生では学力面でできるだけ自信を付けさせる指導を重視している。

実は数年前、同校では生徒の無気力さや基本的な生活習慣の欠如が問題となった時期があった。その頃、赴任した1学年主任の江山薫先生は、そうした問題を改善していくには、基礎学力をしっかりと定着させて、生徒に自信を付けさせることが重要だと考えた。

「10年度の1年生では、入学当初から島根県教育委員会がインターネットで配信している復習プリントを活用して、小学校段階の学習内容に繰り返し取り組むようにしました。基礎学力を定着させてから、その年の『全国学力・学習状況調査』の小学6年生と同じ問題に取り組ませたところ、高い正答率となりました。これが生徒にとって大きな自信になりました」(江山先生)

その後、県の復習プリントの配信はなくなりましたが、江山先生が作成したプリントを使って、1年生段階の復習を丁寧に行っている。

その成果もあり、1年生で基礎学力がしっかり定着するようになっていくという。

特に学習が苦手な1年生に対しては、個別補習も行う。ある生徒は、「勉強を中心に見てほしい」という保護者の意向により、数学・英語を中心に継続的な個別補習を行っている。また、長期休業中も、一斉学習(後述)の後、校長室で補習に取り組んでいる生徒もいるという。

「定期考査の結果が毎回思わしくないと、学習だけでなく、学校そのものが嫌いになってしまふ可能性もあります。最初は十数点でも30点、40点と得点が上がってくれば、達成感から自信を持てるようになり、学習に前向きに取り組めるようになると考えています」(江山先生)

● 家庭学習習慣の定着

1年生も3年生に提出させることで 学習への意識を向けさせる

基礎学力の定着によって自信を付ける指導と並び、同校が重視するのは、学習習慣の確立のための徹底した指導だ。その重要なツールが、全校で実施する「自主学習(自学)ノート」である。毎日、自ら教科を選び、最低ノート2ページ分を学習する。1日4、5ページ取り組む生徒も多く、定期考査前には週末だけでノート1冊を終える生徒もいるという。特徴は、ノートのチェックの仕方と提出方



吉賀町立柿木中学校校長
常岡芳文 つねくに・よしふみ
[Where there is a will, there is a way. 意志あるところに道はある]



吉賀町立柿木中学校
1学年主任 江山薫 えやま・かおる
1学年主任。「継続は力なり。生徒にも結果がすぐに出なくても続ける大切さを伝えたい」

法だ。自学ノートというと、担任が学級の生徒のノートをチェックするというのが一般的だが、同校では学年縦割りで班をつくり、班ごとに担当教師を割り当てる。具体的には、教師1人につき1年生2人、2年生3人、3年生1人と受け持ちの生徒を決めて、学年を超えて全教員でノートチェックを行うのである。そのため、提出先は縦割り班のリーダーの3年生。朝礼終了後、3年生が1・2年生の教室を訪れて自分の班のノートを集め、担当教師に手渡しで提出する。3年生を回収役としたのは、1・2年生にとって、教師よりも先輩を提出先にした方がきちんと取り組もうという意識が働くと考えたからである。この方法にしたのは、常岡校長の経験にある。

「前任校では、自習プリントをレターケースに入れて生徒に持ち帰らせ、週1回、担当教師に提出させていました。しかし、週1回の点検では継続的な学習習慣につながらず、

中学1年生の良さを伸ばす

図 「自主学習ノート振り返りシート」

日	自己評価	担当者より	保護者印
4	毎日のノートを仕上げました！ まためがから問題を解けるようになったのでうれしい。	とにかく1日の勉強量が増えました！ 毎日、頑張っていました。後日、成績の問題もよく解けています。	
5	なるべく教科書やノートを見ながら問題を解いてみました。	頑張って、授業中に積極的に発言していました。問題がわからなかったら、先生に質問して聞いてみるのがいいですね。	
6	練習問題を解くとき、わからないところは見直してやり直しました。	定期試験では、先生から質問を取り返さずに、自分で解決しようとする姿勢が素晴らしいです。	
7	テスト期間中は、テストが終わるとすぐに復習をしました。	自分の勉強のペースを自分でコントロールしています。テストの準備もよくできています。	
8	理科の授業の自主学習のページが、少しづつ進んでいきました。	自分の、理科の授業と自主学習のページが、少しづつ進んでいきました。	
9	昨日に書いたことの復習ができて、よかった。	毎日、復習ができています。テストの準備もよくできています。	
10	自主学習のペースが、もう少し進んでいきました。	意欲が旺盛で、よく頑張っています。理科は、問題の答えだけでなく、自分で考えている姿勢が素晴らしいです。	
11	今日は、テスト前にテスト勉強をしました。	毎日、復習ができています。テストの準備もよくできています。	
12	1日1日を大切に、勉強しました。	入試に向けて、実践的な勉強が、とても上手にできています。着々と実力が蓄積されているように感じます。	
1			
2			
3			

「自主学習ノート振り返りシート」には、生徒が毎月、自ら自主学習ノートにどのように取り組んだのかを書き、担当教師が良い点を褒めたり、アドバイスをしたりする。保護者が子どもの家庭学習の様子を知る機会にもしている
* 同校の資料をそのまま掲載

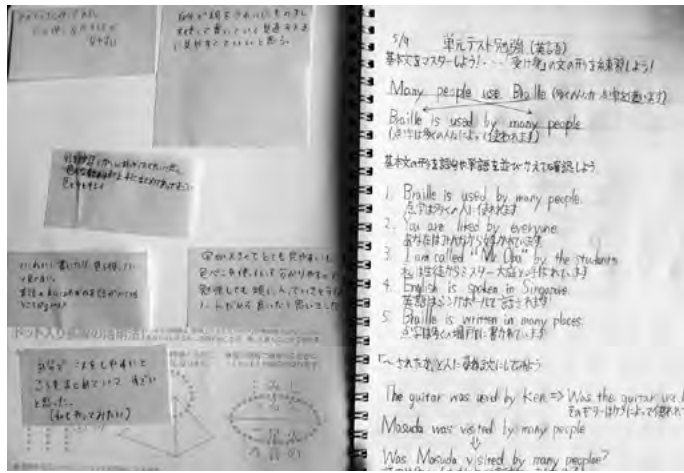


写真 「自学ノート」。生徒同士でノートを見せ合い、良いと思った点、まねしたい点などを付せんに書いて貼る。

月1回の振り返りシートで学習の状況を保護者にも知ってもらおう

提出されたノートは、担当教師が点検し、

積極的に取り組む生徒とそうでない生徒の差が生まれて、切磋琢磨する雰囲気をつくれませんでした。また、提出しない生徒に教師側が根負けし、指導の継続を諦めてしまう状況も生まれました」(常國校長)

そこで、同校では、「我が子」としてかわらうという共通理解を図り、生徒の提出を毎日確実に促し、全教師で生徒の学習を支援する体制とした。

①ノートには必ず日付、学習時間、学習の目的を記入する。生徒が目的意識を持って、

「少しずつやる気が出てきたのはいいことだと思う」「英語や社会も徐々に取り組んでいこう」などの前向きなコメントを書き込む。教科の専門的なアドバイスが必要な場合は、「○君は方程式でつまづいているので、良い練習問題はありますか」と教科担当に聞いた上で書き込む。点検後は、担当教師が学年部のボックスにノートを入れて、集配係が各学年の生徒に返却する。

②家庭との連携を図るため、「自主学習ノート振り返りシート」を月1回提出する(図)。月末に生徒自身が反省を、担当教師がコメントを書き、保護者の検印をもらう。

③教師が出張などで不在となる場合は、担当の班を持たない常國校長と養護教諭、もしくは担当教師が所属する学年部が対応し、毎日確実にノートをチェックする。

また、学期に1回、クラス内で自学ノートの見せ合いを行っている。これは、友だちのノートを見て、良い点や参考になった点などを付せんに書いて貼るといった活動だ。生徒は

友だちの指摘を受けて、自分の学習法の良さが分かると共に、友だちのノートを見ることで自分の課題に気付き、改善を図る（P.17写真）。

1年生には、自学自習の方法を習得するために、授業中に「ここは自学ノートにまとめておくといいよ」「自学ノートに表を書いておこう」というように、具体的なアドバイスをします。1年生のうちには自学自習の方法が分からない生徒も多いため、ヒントを出して、自学のコツを身に付けられるようにしている。

コラム 学校通信「とびのこ」

学校通信「とびのこ」には、生徒指導や人権教育、その他、常國校長が生徒や保護者に伝えたいメッセージが満載だ。編集・執筆は常國校長が行い、月1回発行する。学校行事の報告やPTA総会の案内など、基本的な情報開示はホームページで行い、学校通信では、学校として生徒・保護者と共有したい思い、生徒と地域の触れ合いの様子などを伝えることを目的とする。教育長や小・中学校、民生委員などにも配布したところ、地域の人々からも毎月届けてほしいという声がかかるようになった。現在も、学校と地域をつなぐツールとして機能している。
*同校の資料をそのまま掲載

●学年縦割りの活動

上級生から教わることで
学校文化への意識が高まる

生徒の自信を高めるため、学年間の交流を日常的に展開しているのも、同校の特徴だ。

学校行事は、ほとんどを縦割り班で活動し、上級生が下級生を指導する。例えば、文化祭の最後を飾るソーラン節の指導は、代々、3年生の役割だ。1年生は先輩から学校文化を伝えられることで、伝統を受け継ぐ責任と誇りを感じ取っていく。

生徒会役員になりたいという下級生が多い

のも、憧れの先輩に少しでも近付きたいという生徒の思いの表れだろう。13年度生徒会の役員選出では、立候補する生徒が例年になく多く、出来る限り多くの生徒に役割意識と責任を持たせたいという思いから、役員数を増やした。

「先輩の生き生きとした姿を見て、『自分もあんな先輩になりたい』という憧れを持つことが生徒を大きく成長させるきっかけとなります。委員会活動を通して自治性を育みたいという先生方の意識が根付いてきていると感じます」と常國校長は評価する。

●学校全体で取り組む意識の醸成

朝学習と長期休業中の一斉学習で
静かに学習に取り組む環境をつくる

このように、組織的な活動を成功させるためには、学校全体で学習に向かう雰囲気や醸成することも重要となる。

そうした雰囲気づくりの1つが、朝礼前の朝学習だ。8時10分からの10分間、職員朝礼の時間を生徒の自学自習に充てている。1年生には、この時に同一の課題を出し、週末に確認テストを行って基礎学力の定着を図る。

中学1年生の良さを伸ばす

例えば、ある週は数学の方程式の課題を出し、金曜にテストを行い、基準点に達しない生徒は、放課後、補習プリントに取り組みさせる。

「不合格者の多くは、放課後を待たず、昼休みに自ら補習プリントを受け取りに来ます。補習に参加して部活動に遅れると準備を上級生に任せることになるので、放課後の居残りは避けたいと強く思うようです」(江山先生)

長期休業中には、部活動前に生徒全員が集まり一斉学習を行う。夏休みは7時45分から、冬休みと春休みは8時から1時間、宿題や町の統一テスト、学力テストに向けた学習に取り組む。

「長期休業中は、学習時間が確保しやすいと思いがちですが、実際には、生徒は朝早くから部活動の練習をし、家に帰ると疲れて寝てしまいます。中学校はとかく部活動が優先になりがちですが、部活動が始まる前に1時間、学習に落ち着いて取り組ませることで、生徒に『まずは勉強』という意識が根付いてきていると感じます」(常國校長)

①学習、②委員会、③部活動と活動の優先順位を明確化

学校全体で学習への意識を醸成するためには、教師の意思統一も欠かせない。同校では、①学習、②委員会活動、③部活動と、生徒が取り組むべきことの順序を明確にし、教師間で共通理解を図っている。

部活動の優先順位は相対的に低いが、決して部活動を軽んじているわけではない。同校の実績を見ても、陸上部は郡内トップクラスの実力であり、バレーボール部も近年、力を伸ばしている。卓球部は、12年度に石見地区大会で初優勝を果たした。

「学習と部活動のめりはりをきちんと付けることで、部活動に対する集中力も高まっているのではないのでしょうか」(江山先生)

12年度には校長・教頭も含めた教師全員が授業を公開する取り組みも始めた。常國校長も英語の授業を行い、教師全員が参観した。

「生徒に単に学習しなさいと言うだけでは、説得力がありません。授業公開は、先生たちも勉強しているのだから、君たちも頑張りなさいという、私たちからの生徒へのメッセージにもなるのです」(常國校長)

12年度、常國校長は「故郷を愛し、礼儀を重んじ、確かな学力を備えた、自他の人権を尊重する生徒の育成」を教育目標に掲げ、特に、あいさつ指導や人権教育にも積極的に取り組んできた。

「本校には、一対一では自分からあいさつが出来ても、集団の中に入ると先にあいさつが出来なくなる生徒が見られました。自分以外にも行動する人がいると、どうも他人事になっってしまうようです。生徒には、集団の中でも自らあいさつや行動が出来る『型』を身に付けさせたいと思っています」(常國校長)

常國校長が考える1年生に大切な指導

教育に派手な取り組みは必要ありません。大切なのは、漫然と指導するのではなく「指導し切る」ことです。優れた取り組みであっても、尻すぼみになっては意味がありません。大切なのはシステムや言葉ではなく、根負けしない継続的な実践ではないでしょうか。教師が、これを持続していけば確実に力が付くと信じた取り組みを、地道に、確実に続ける。生徒が諦めたりだらけたりした時は信念を持って「続けなさい」と諭し、成果が出た時は「よくやった」と励ます。一連の過程を経た後に、生徒は学ぶ楽しさに出会うと信じています。

こうした取り組みをどこまで徹底できるかは、教師にどれだけ「我が子のように生徒を見守る心」があるかだと、常國校長は説く。

「学習指導にせよ生徒指導にせよ、大切なのは、どれだけ教師が生徒に『あなたのこと pensando と思っています。しっかり頑張りなさい』というメッセージを届けられるかだと思っっています。自分が期待されると感じれば、その思いは真綿に水がしみ込むように生徒の意識に浸透していきます。『自分は見捨てられない』という素直な心が、学びに向かう素地をつくるのです」(常國校長)

自分や他者を「認める」指導で 生徒や学級集団の力を引き出す

茨城県 日立市立多賀中学校

1年生段階で、生徒が自己有用感を持つことが、3年間の出発点になるといえる。日立市立多賀中学校の教育方針だ。そのような指導によって生徒は自信を持って自律した学校生活を送れるようになり、生徒同士が互いに高め合う集団が形成されやすくなると考えている。

●課題

3年間の指導のステップは 認める・磨く・高め合う

日立市立多賀中学校は、日立市の中央部に位置する住宅街にある中規模校だ。教育に熱心な保護者が多いこともあり、生活指導面における課題は少なく、1年生の時から落ち着いて学習に取り組み、県の学力テストでは平均よりも高いレベルにある。

一方で、最近気になる傾向として「たくましさ」に欠けることが挙げられると、1学年主任の鬼澤篤子先生は話す。

「つまずいたり、困難に直面したりした時に、立ち向かう気持ちが弱いと感じます。新しいことに挑戦するたくましさや身に付けることが、本校の教育活動のねらいの1つです」

学びに向かう原動力となるのは、将来に対する明るい展望だ。そこで、生徒が夢や希望を持ち続けられるような指導も大切にする。

また、生徒は主に3つの小学校から入学するが、人間関係をうまく構築できない生徒が年々増えている。生徒同士の交流の場を多く設けると共に、一人ひとりのコミュニケーション能力を高めることも重視している。このような力や姿勢を育てるために、同校

が心掛けていることは、1年生は「認める」、2年生は「磨く」、3年生は「高め合う」という指導のステップだ。

1年生の段階では、自分自身、そして友人の良さを認めることで、一人ひとりが居場所を見付けられる集団の育成に努めている。生徒同士が認め合うことから生まれる良好な関係を土台として、2年生ではそれぞれが磨き合う場を意識して設けている。そして、3年生では、教師の助けがなくても、生徒同士が自主的に高め合える関係の構築を目指す。鈴木修市校長は次のように語る。

「3年間の目標を達成するための基礎とな

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「一人一人の『生きる』のために、一人一人の人間性の伸長のために」を教育理念とし、生徒の可能性を最大限に引き出す教育活動を展開。2010年度「優良PTA文部科学大臣表彰」受賞。



校長◎鈴木修市先生

生徒数◎512人 学級数◎16学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒316-0036 茨城県日立市鮎川町 3-11-2

TEL◎0294-36-0533

URL◎<http://www.taga-j.hitachi-kyoiku.ed.jp/>

公開研究会◎未定

中学1年生の良さを伸ばす

るのが、1年生段階での育ちです。中学校は教科担任制になるなど、小学校と比べて教師との結び付きが弱まりますから、自分に自信を持って自律した学校生活を送れるように導いていくようにしています」

●活動の工夫と成果①

1学年の4分の1が 学年生徒会の役員を経験

自分や他者を「認める」ことを促す1年生の指導を具体的にみていこう。

生徒の自己有用感を高めることに結び付いている取り組みが、学年生徒会だ。学年生徒会の役員は、前・後期のそれぞれ、全5学級から4人ずつ、計40人が選出される。1学年約160人のため、4分の1が役員を経験することになる。

生徒の主体性を重視し、議題の多くは役員の発案によるものだ。例えば、「最近、服装が乱れている生徒がいる」という声が役員から上がり、学年集会で注意を促すことになった。その時、単に壇上から話すだけでは伝わりにくいと考え、役員がわざと乱れた服装をしてファッションショーのように登場し、どこを直すべきかをクイズ形式で問うことにした。役員が企画・運営したこの集会は大いに盛り上がり、服装への意識を喚起する効果が見られたという。

「初めは『自分に務まるだろうか』と不安

を抱く役員もいますが、アイデアを出し合ったり、集会を運営したり、前面に出て活動するうちに次第に自信を深めていく姿が見られます」（鬼澤先生）

集団の力をより引き出すためにリーダーを育てることも、学年生徒会の役割だ。そこで、1回目の学年生徒会では、「どのようなリーダーになれば、皆が協力してくれるだろうか」と、役員全員で目指すリーダー像を話し合う。「自分たちが率先して生活を正す」「皆のことをよく考える」といった結論が導かれることが多いという。

ただ、生徒に役職を任せるだけで、リーダーシップが身に付くわけではない。学年生徒会担当の大谷智恵美先生はこう強調する。

「話し合いの進め方など、自分たちの思いを実現するための『型』を教えることが1年生では大事です。型が身に付けば、そこから発展して応用できるようになります。また、リーダー同士が仲良くなるよう促すことも大切にしています。そうすれば、自分の学級の課題などを互いに相談して、アドバイスできるようになるからです」

前期の役員は小学校でリーダー的な存在だった生徒が多いが、その活動を見て、「楽しそう」「自分もやってみたい」と、後期は比較のおとなしい生徒が立候補するケースもよく見られる。「自分はリーダーとして前に出るタイプではないが、リーダーの補佐役を



日上市立多賀中学校校長 鈴木修市 すずき・しゅういち
「子どもを宝物として大切にしている人たちが、生徒の後ろにはたくさん存在することを常に心掛ける」



日上市立多賀中学校 おにざわ・あつこ
鬼澤篤子
1学年主任。英語科。「一生、勉強。一生、青春。自分を、そして今を大事にして自己実現をしてほしい」



日上市立多賀中学校 おおたに・ちえみ
大谷智恵美
学年生徒会担当。1学年担任。「家族と同じような気持ちを持って、生徒一人ひとりを大切に」



写真 学年生徒会の様子。自主性を大切にした運営により、1年生のリーダーシップを育てるきっかけとなっている学年生徒会。この活動を機に、中学生としての意識が大きく育つ生徒も少なくない

務めてみたい」と、挑戦する生徒もいる。

「サブリーダー的な生徒にとっても、学年生徒会は成長への大きなきっかけになります」（鈴木校長）

リーダーシップだけではなく、その他の生徒のフォローシップを育てることも留意している。リーダーとフォロワーの良好な関係が集団としての力につながるからだ。

「投票の時に『皆で決めるのだから、きちんと協力しよう』と指導し、選んだ側にも責任を持たせるようにしています。日頃から、役員は皆のために一生懸命に考えたり、陰でさまざまな仕事をしていることも伝えていきます」(大谷先生)

役員に協力的な態度が生徒の間に育っていることが、「自分も役員をやってみよう」と考える生徒の増加にもつながっていると分析している。

●活動の工夫と成果②

学年通信に全員の声を掲載 生徒の活躍を保護者と共有

次に、1年生の1学期に実施する「心ゆたかな体験活動」に注目したい。

この活動は市内の全公立中学校が行うものだが、宿泊地や活動内容は各校に任されている。同校は、人間関係づくりに加え、一人ひとりの自己有用感の向上やたくましさの育成に重点を置いている。

宿泊地は、電気の通っていないキャンプ場だ。そこに半日掛けて歩いて行き、テント設営や食事の用意などを全て生徒の手に委ねることで、困難な場面にも挑戦する気持ちの萌

芽を促している。

キャンプ場で行う活動は、学年生徒会役員、および「食事づくり」「グループ活動」など5つの実行委員会のメンバーの計50人を中心に進める。他の生徒も何らかの係を担い、全員に役割を持たせる。

「生徒主体の運営のため、自分たちでアイデアを出して実行する必要があることを実感します。それにより、一人ひとりに『自分か動かないと物事が進まない』という意識が芽生えます。活動後は、自信を持って主体的に発言したり動いたりする姿が見られるようになります」(大谷先生)

こうした生徒の頑張りを認め、保護者と共有するために、学年通信「かしわ」を月2回発行する(図)。学校行事や学習内容を伝え、学年生徒会役員、学校行事の実行委員会メンバーなどの声を掲載する。

「生徒に原稿を依頼するなどして、1年間で全ての生徒の声を載せるようにしています。自分の役割の大きさを認識してもらい、これからの学校生活への意欲を高めてほしいという願いがあります。保護者から褒められ、家庭でも認められることで自信にもつながります」(鬼澤先生)

保護者の評価は高く、「全てファイリングして保存している」といった声も聞かれるという。また、学校のブログも毎日更新し、保護者とリアルタイムに情報を共有している。

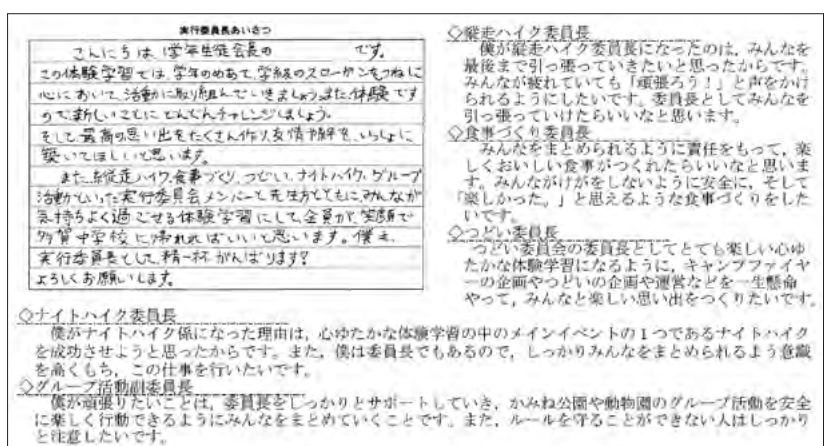
●活動の工夫と成果③

話し合いの習慣化により 学級の「自治」が促される

3年間の指導の目標は、「主体的に高め合う生徒の育成」だ。そのスタートである1年生から、日々の指導の中に話し合う活動を取り入れている。

1年生の最初は、「先生、どうしたらいいですか」などと教師に判断を仰ごうとする傾

1 学年通信「かしわ」(抜粋)



学年通信には、生徒の声を出来るだけ多く載せるようにしている

*同校の資料の一部を掲載

中学1年生の良さを伸ばす

向が強い。そのような時は、教師が間に入りながら、生徒同士の話し合いで解決できるように促す。ただ、人間関係が出来ていない段階では、みんなの前で意見を言うのは難しい。そこで、発言に対して、教師が「今の考えについてどう思う？」などと質問し、一人ひとりに発言させて話し合いをつくり上げていく。話し合いは、学活や休み時間、帰りの会など、課題が持ち上がった時に行く。

「自分たちの話し合いを通じて課題を解決していくという経験を積み重ねることで、次第に話し合いが普通となり、『先生、こんな話し合いをしたのですが、一緒にいてくれませんか』といった提案を受けるようになります」（大谷先生）

11月のある日、大谷先生は「学校に持ち込めるはずのないヨーグルトのふたが落ちていたので話し合いたい」と、生徒に持ち掛けられた。生徒には、犯人探しではなく、きれいな教室を維持するためのルールを考えたいという思いがあった。

「問題自体は小さなことかもしれませんが、自分たちで話し合って解決したいという思いが生まれた点に1学期からの成長を感じ、とてもうれしく思いました」（大谷先生）

話し合いの結果、教室を清潔に保つための方法を各自が考えることになり、持ち寄られたアイデアを基に、学級で守るべきルールが決められていった。生徒の気持ちが学級の「自

治」に向かっていることがよく分かる例だ。

●活動の工夫と成果④

「些事を大切に 他者を思いやる感性を育成

決して目立つ取り組みではないが、「些事を大切に」する指導も重視している。些事とは、教室に落ちていくゴミに気付いて拾ったり、靴箱に靴を揃えて置いたりすることだ。なぜ、そのような点に着目しているのか。

「人の気持ちを思いやる豊かな感性は、こまやかな気遣いがなければ育たないからです。そこで教師は、ささいな場面でも当たり前のことをしっかりと出来ている生徒を褒めるようにしています」（鬼澤先生）

学校のルールとは別に、日常の細かなことについて、自分たちでルール化する指導も取り入れている。例えば、給食のおかわりの仕方ルールにした学級もある。ルールの内容より、1年生の時期から「皆で決めたルールは皆で守ろう」という気持ちを育てることが重要だという。

「『自分は関係ない』という気持ちの生徒がいると問題や荒れが発生しやすくなります。例えば、学年の行事で動く生徒と動かない生徒が分かれている場合などは、1人の責任放棄が全体に影響しますので注意して指導しなくてはなりません」（鈴木校長）

今後、取り入れたいと考えているのが小学

校と連携した指導だ。例えば、自分が卒業した小学校でボランティアをしたり、小学校の先生に手紙を書いたりする活動を検討中だ。「小学校の先生に成長を改めて認めてもらったり、小学生だった頃の自分を見つめ直したりすることで、『中学校でどのような力が付いたか』『2年生になったら何を頑張りたいか』といった考えが生まれるきっかけになると思っています」（鈴木校長）

そのように、生徒の内面に十分に働き掛けることによって、一人ひとりの力を引き出したいと考えている。

鈴木校長が考える1年生に大切な指導

中学生は大人になるための大切なステップです。一人ひとりの成長のスピードは異なり、中には時間の掛かるケースもありますが、それぞれの状況を見取って適度な壁や段差を準備することを1年生の指導として重視しています。そのためには、学級や学年にまとまりがあって安定していることが重要です。校長として、適材適所の教員配置を心掛けるなど環境を整え、指導体制がうまく機能するようにしています。また、私自身が授業や部活動をよく観察し、生徒の状況を把握することにも努めています。

中学1年生の良さを伸ばす指導に向けて

中学校の3年間で生徒が大きく成長していくためには、1年生での指導でその土台をしっかり築くことが重要となる。国立音楽大の新藤久典教授、3校の学校事例を通じた編集部からの提案と、1年生の良さを伸ばす指導成功のポイントをまとめた。

今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

「型」をつくるために 中学1年生の「良さ」を引き出す

今号の特集は、本誌がこれまでの取材で多くの先生方からうかがった「3年間の短い中学校生活で生徒を大きく成長させるためには、1年生の過ごし方が大事」という言葉に正面から向き合うテーマとした。

改めて、1年生が直面する課題に焦点を当てると、教科担当制になり、教科ごとに進め方が多様になる授業、たくさん課される宿題、先輩と体力差がある中でついていかなければならない部活動、先輩や同級生と築く新しい人間関係など、適応すべき課題がさまざまにあることが分かる。1年生がそうした一つひとつの課題を乗り越えていく過程において、学校は、教師はどのような姿勢で指導してい

けばよいか。

国立音楽大の新藤久典教授は、自身の中学校での指導経験を踏まえ、「中学1年生の良さを引き出し、伸ばす」という視点の重要性を示唆した。1年生に中学生としての「型」を身に付けさせることは重要だが、教師の思いが先走り、規律指導一辺倒になっていないか、1年生の成長や課題を上級生との比較の中で捉え過ぎてはいないかと指摘し、目の前にいる1年生の姿を見取り、自信を持たせて、自立を促す指導の大切さを説いた。

そこで挙げられた5つの指導のポイント
は、学校事例で紹介した3校の取り組みにも具体的に反映されていたが、今回は特に2つに注目したい。

1つめは、1年生に企画・運営などを任せ、主体性を引き出す活動を意図的に取り入

れることだ。1年生は、行事や部活動では上級生の指示に、授業では教師の指導に「従う」場面が多く、自ら意見を言うなどの積極性を出しづらい。しかし、新しい生活に胸を膨らませて1年生だからこそ、学習でも行事でも主体的に取り組ませるチャンスではないだろうか。

大阪市立淡路中学校では、小学5年生を対象とした中学校の体験授業で、1年生を「リトルリーダー」というサポート役にして「先輩」としての役割を担わせ、小学生との交流活動や支援内容を自分たちで考え、運営させていた。また、日立市立多賀中学校は、学校全体の生徒会とは別に「学年生徒会」を設け、学年行事の運営や学年の自治を任せている。吉賀町立柿木中学校では、「自主学習ノート振り返りシート」で月1回、家庭学習について振り返り、自分の課題や目標を考えさせる場面を設けて、学習に自ら取り組む姿勢を育もうとしていた。

中学1年生の良さを伸ばす

2つめは、活動をグループで行い、集団としての力を高めることだ。3校とも、紹介した取り組みはグループ活動が基本であった。グループ活動の利点はさまざまにあるが、特に1年生にとっては、多くの場合、複数の小学校から生徒が集まって新しい友だちができ、また部活動や委員会活動を通していろいろな先輩と出会う中で、今までにない刺激や目標を得られる機会になることが挙げられる。

日立市立多賀中学校の「学年生徒会」では、前期は小学校でもリーダー格だった生徒が委員に立候補するが、後期にはその活躍を間近で見ていたサブリーダー格の生徒が立候補するようになるという。吉賀町立柿木中学校は、クラスで「自主学習ノート」を見せ合う機会を設け、友だちがどのような学習をしているのかを知ることによって、自分の学習を振り返り、学習への意識を高めようとしていた。また、大阪市立淡路中学校では、小学生の体験授業当日に向けた準備を数カ月にわたって行うが、その全てをグループで行い、学力だけでなく、仲間のさまざまな顔を見る機会をつくり、仲間づくりを促していた。

まだ中学校になじんでいない1年生だからこそ持ち得る意識、つくり出せる環境などがあるはずだ。今号の特集が、1年生の持ち味や良さを引き出す指導を考える1つのきっかけになれば幸いである。

中学1年生の良さを伸ばす指導成功のポイント

**「先輩」としての活動に
継続的に取り組み、自覚を持たせる**

大阪市立淡路中学校（P.10）の「リトルティチャー」は、単発の活動ではなく、準備活動を含め、半年間継続して行うことで、1年生に「中学生」としての自覚を持たせ、それを学習意欲の向上や生活態度の改善に結び付けていた。準備活動では、上手な話の聴き方、褒め方、相手の立場で考える大切さなど、コミュニケーションで大切な技能も学ぶ。こうした力を付けた上で、グループで小学生との交流会や支援の内容を考えることによって、仲間意識を高め、クラスの信頼関係を築いていた。この互いを認め合う関係があることが、普段の授業の「安心して学べる環境」につながっている点に注目したい。

**1年生の気持ちをくみ取った
方法で学習へ意識を向かわせる**

吉賀町立柿木中学校（P.15）は、学力面から1年生に自信を持たせ、自ら学ぶ姿勢を育もうと、入学時から小学校段階の復習を徹底的に行っていた。「自主学習ノート」は、小規模校の利点を生かし、学年縦割りの班活動とし、教師全員体制で毎日チェックをして

いた。また、ノートの回収役を3年生にしたり、テストの不合格者には放課後補習を行って部活動に参加しにくいようにしたりと、「先輩に迷惑はかけられない」という1年生ならではの気持ちをくみ取った方法を取り入れていた。活動を見直す際には、1年生の心理をもっと考慮するとよいかもれない。

**自己有用感を高められる
集団づくりを行う**

日立市立多賀中学校（P.20）では、3年間を3つのステップで考え、1年生を「認められる段階として、自分や友だちの良さを認められるような集団の育成に努めていた。「学年生徒会」に行事の運営を任せ、行事の成功には生徒全員の協力が重要であることを認識させ、リーダーだけでなく、生徒それぞれが活躍する場を設けていた。そうした意識と場づくりの手順が示されているので、参考にしたい。また、学年通信には、生徒が活動で感じたことを、1年かけて全員分紹介していた。そこでは、生徒に自分が果たした役割の大きさを改めて認識させ、自己有用感を持ち、学校生活への意欲を高めるといった効果が見られた。学年通信を生徒の活躍を伝える場としてもっと活用してもよいだろう。

成績伸長別に見る生活習慣や意識の違い

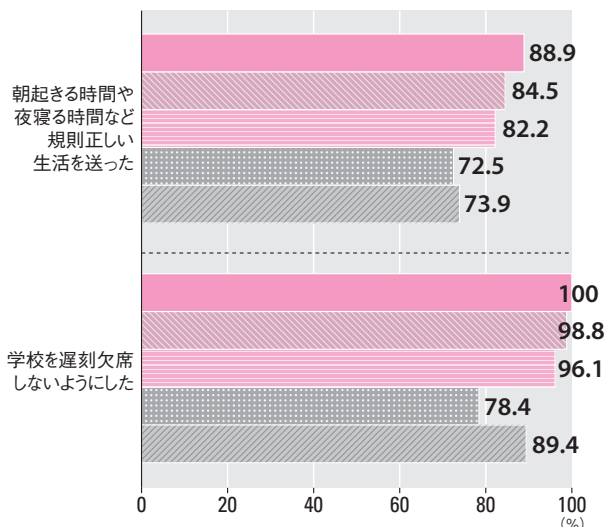
「中学1年生の学習と生活に関する調査」結果から

中学1年生で成績が伸びた層と、伸び悩んだ層には、家庭での様子や意識の違いはあるのだろうか。前号に続き、中学1年生の意識調査の中でも特に生活・意識面に焦点を当て、両者の特徴を分析する。

1 成績が伸びた生徒のほぼ全員が遅刻欠席をしないように意識している

生活規律

■ 中上位から最上位 ■ 中位から上位 ■ 常に中位
■ 上位から下位 ■ 中位から下位



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

生活の様子を見ると、成績が伸びた層は「学校を遅刻欠席しないようにした」の肯定率がほぼ100%で、きちんと学校に通おうとしている様子が見えてくる。また、「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活を送った」の肯定率も高い。生活のリズムをきちんとつかむことが、学習面にも良い影響を与えるのだろう。

「中学1年生の学習と生活に関する調査」概要

今回は、特に生徒の学力変化に着目しデータを加工・分析している。成績に関して尋ねた項目（「5」が上の方、「4」が真ん中より上の方、「3」が真ん中くらい、「2」が真ん中より下の方、「1」が下の方）を活用し、生徒を分類。中学1年生1学期の成績から1年生終了時まで、中位から上位に変動した生徒を「伸びた生徒」、上位・中位から下位に落ち込んだ生徒を「伸び悩んだ生徒」として、その特徴を追いかけた。「真ん中より下の方・下の方」から「上の方・真ん中より上の方」に移動した生徒もいたが、サンプル数が少ないため今回の分析からは除外している。

成績の変動ごとにその構成比率を見てみると、成績が伸びた生徒、伸び悩んだ生徒はそれぞれ約2割、あまり変動しなかった生徒は約6割であった。

中学1年生1学期から1年生終了時までの成績変動		
伸びた生徒	中上位（真ん中より上の方）→最上位（上の方）	81人
	中位（真ん中くらい）→上位（上の方・真ん中より上の方）	84人
あまり変動しなかった生徒	中位（真ん中くらい）→中位（真ん中くらい）	517人
伸び悩んだ生徒	上位（上の方・真ん中より上の方）→下位（真ん中より下の方・下の方）	51人
	中位（真ん中くらい）→下位（真ん中より下の方・下の方）	142人

■ 調査主体／Benesse教育研究開発センター

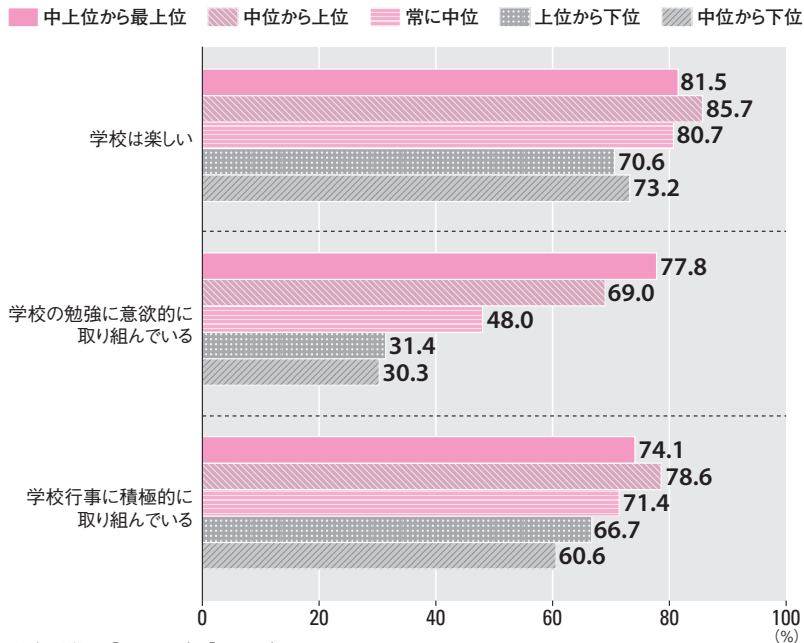
■ 調査期間／2012年7月

■ 調査対象・内容／全国約3000人の中学2年生とその保護者を対象に、中学校入学後のギャップや学習習慣、日々の過ごし方などについて尋ねた。有効回答数は875人

中学1年生の良さを伸ばす

2 学習以外に、学校行事などにも積極的な成績伸長層

学校生活に対する意欲



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

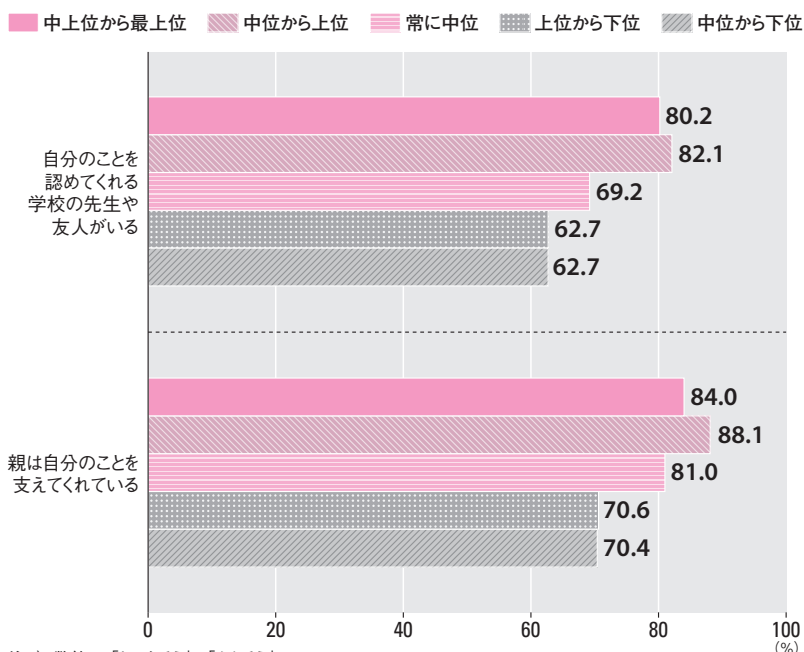
学校生活に対する意欲を、成績の伸び別に分析した。

成績が伸びた層では、「学校の勉強に意欲的に取り組んでいる」と答えた生徒が多く、学習意欲が成績に反映されているといえる。更に、「学校は楽しい」「学校行事に積極的に取り組んでいる」の比率も高い。

勉強だけでなく、学校行事などにも意欲的に取り組むことが、成績の伸びに関係しているといえそうだ。

3 成績が伸びた生徒は、他者に認められ、支えられていると感じている

先生や友人、保護者との関係



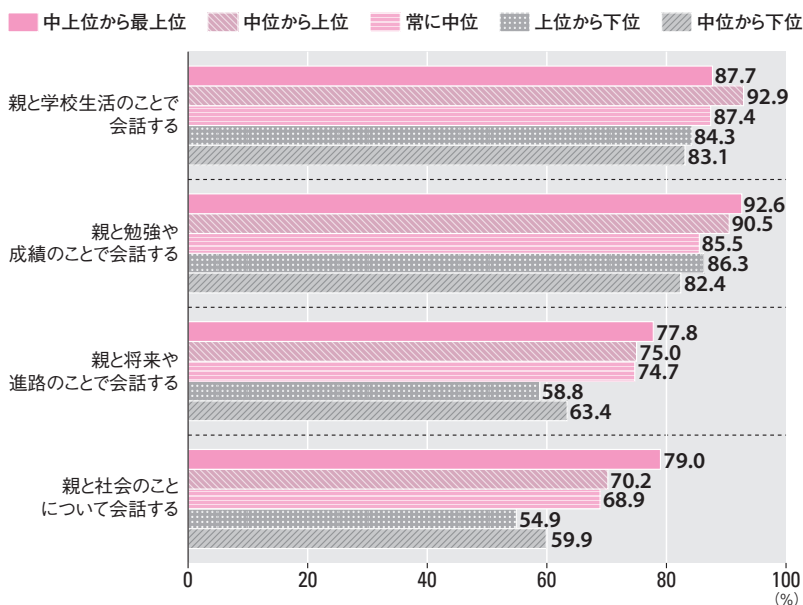
注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

学校の先生や友人、保護者との関係において、成績との関連を見ていくと、成績が伸びた層では、「自分のことを認めてくれる学校の先生や友人がいる」「親は自分のことを支えてくれている」の比率が高く、他者からの承認を感じている様子が見られる。

学力向上を図るためには、その前提として、生徒が安心して学習に向かうことが出来る学校の先生や友人、保護者の存在が重要といえそうだ。

4 成績が伸びた生徒は 進路や社会のことについて保護者と話す

保護者とのコミュニケーション



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

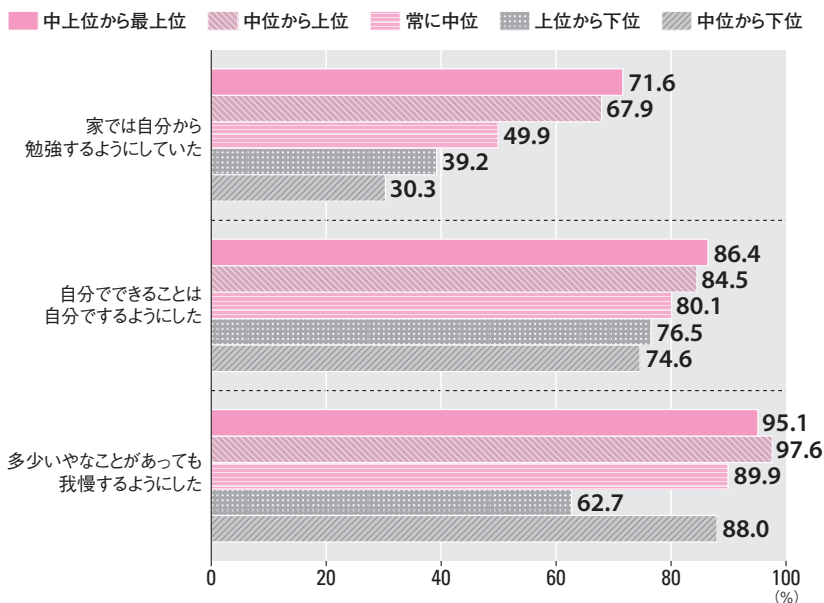
保護者とのコミュニケーションは、成績にどのように影響するのだろうか。

成績が伸びた生徒は、成績が伸び悩んだ生徒に比べて、「学校生活のことで会話する」「勉強や成績のことで会話する」「将来や進路のことで会話する」「社会のことについて会話する」の比率が高い。特に、将来や進路、社会のことに関する話題は、伸びた層と伸び悩んだ層とで、20ポイントほどの差がある。

保護者との会話の内容も、成績に影響しているといえる。

5 自主的、かつ粘り強く物事に取り組む傾向は 成績が伸びた層に見られる

日常生活における心掛け



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

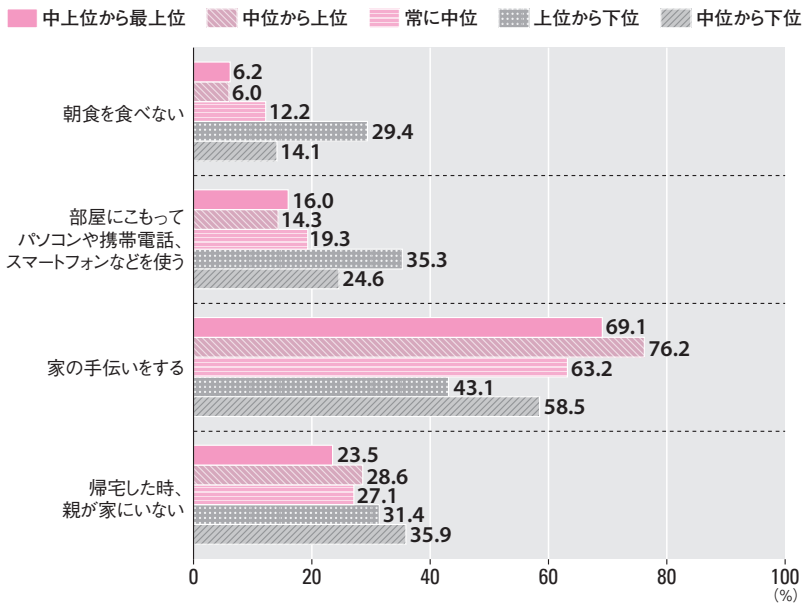
普段の生活における意識や姿勢を見たところ、成績が伸びた生徒で「家では自分から勉強するようにしていた」「自分でできることは自分でするようにした」の比率が高い。学習だけでなく、何でも自主的に取り組む姿勢があるようだ。

「多少いやなことがあっても我慢するようにした」の項目では、成績が伸びた生徒で若干ながら比率が高い。ただ、成績が上位から下位に落ち込んだ層では、比率が極端に低くなっている。中学校生活への不適応が、学習面にも大きな影響を与えているのかもしれない。

中学1年生の良さを伸ばす

6 成績が大幅に落ち込んだ層の生徒は朝食を食べずに登校し、家族とのかかわりも薄い

家庭での過ごし方



注1) 数値は「ほぼ毎日」+「時々あった」の％
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

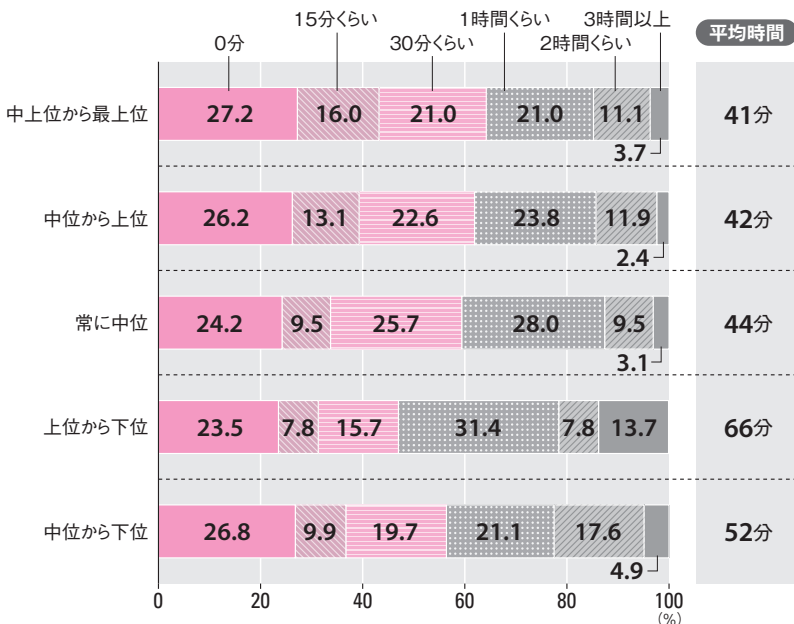
家庭での過ごし方に関する項目を見たところ、成績が伸び悩んだ生徒の回答で特徴が見られた。

特に、上位から下位に成績が落ち込んだ層の傾向として、「朝食を食べない」「部屋にこもってパソコンや携帯電話、スマートフォンなどを使う」が、他の層よりも比率が高かった。また、「家の手伝いをする」では、最も比率が低い。

成績が特に落ち込んだ層の生徒は、家族とあまりかかわらない様子がうかがえる。

7 成績が大幅に落ち込んだ層の約14%が1日3時間以上、ゲームに時間を費やしている

ゲームに費やす時間



出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

ゲームに費やす時間を成績の伸長別に見ていくと、その平均時間は、成績が伸びた層や成績が変わらなかった層では、約40分と大差がなかった。

ところが、成績が伸び悩んだ層では、ゲームに費やす時間が長い。特に、上位から下位に成績が落ち込んだ層では「3時間以上」と回答した生徒が13.7%、平均時間も66分と、5つの成績変動の区分の中で最も高くなっている。学習に向かえずに、成績が落ち込んでいる可能性がうかがえる。



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

職務が増えても効率よく取り組み 生徒との時間を一番大切にする

東京都文京区立音羽中学校 稲田 剛 41歳



Middle Leader

あきた・たけし◎教職歴13年目。北区立北中学校（現・桐ヶ丘中学校）に勤務後、文京区立第七中学校に赴任。2009年に同校と第五中学校が統合して開校した音羽中学校に継続して勤務。担当教科は社会科。学年主任。校務分掌は進路学習

これまで私が歩いてきた道のり

**他人に任せず
1人で突っ走り
学年団に不協和音が**

教師になって5年目に、初めて学年主任になりました。1年生で担任をした学年で、持ち上がった2年生で主任を任されたのです。その年は都の教育研究員を務めることにもなっていたのですが、重要な仕事を任されたのだから、その期待にしっかりと応えなければと思いました。朝は早く学校に来て、夜は誰よりも遅く帰る。睡眠時間を削って、がむしゃらに頑張りました。

当時の私の学年主任としての姿勢

は、自分が先頭を走るので付いてきてくださいというものでした。学年行事の内容を決める時も、最終的には自分の考えている案でいきたいという思いから、反対意見が出ないように進めました。必要な作業にしても、ある程度まで私がやってから、先生方に渡して完成させてもらうようにしていたのです。

しかし、今思えば当然ですが、先生方には不満が募っていききました。一方の私も、他学年の先生に「学年の先生が動いてくれない」などと愚痴をこぼしていました。双方がそういう態度です。学年団の雰囲気は悪くなる一方です。更に、そうし

た教師の不協和音は、生徒にも伝わります。私が不満に思う先生への態度を、生徒は敏感に察知し、いつしか、その先生の話を聞かなくなっていたのです。

いつも仕事をたくさん抱えて余裕がなく、一番大切にしていたはずの生徒と接する時間も大幅に減っていました。自分で何でもやるうとしていたことが、全ての悪循環の原因になっていました。

**仕事の優先順位を付け
学年で分担し
生徒と接する時間を確保**

このままではだめだ……私は気付いたことから仕事の仕方を変えていきました。まず、学年会で話し合い、役割分担とスケジュールを明確にした上で、先生方に最初から仕事をしてもらうようにしました。

仕事の優先順位をきちんと付けるようにもしました。活用しているのは週案です。週末に翌週の授業内容と行事などと共に、すべき作業を書き出します。作業の期限を考えて、いつ何をするか見通しを立てておくのです。仕事を効率よく進め、時間も心も余裕を持って生徒と接するよ

うにするためにも重要でした。
態度も改めました。学年団は1つ
のチームです。仲間の陰口をこぼす
のは、チームの信頼を裏切ること
になります。いろいろな価値観を持ち、

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

いろいろな人生に 触れさせて 折れない心を育てたい

2012年度は、本校で2回目の
1学年主任を務めています。学年主
任として力を入れていることの1つ
は、キャリア教育の体系化です。前
回3年間持ち上がった時は、各活動
が単発になっていました。その反省
もあり、今回は、生徒が5年後、10
年後、社会に出る時に必要となる力
は何かを大学、高校と逆算して考え、
中学校ではどのような力を育ててい
けばよいのか、私自身、答えを探し
ながら活動をしています。

現在、私が目指しているのは、生
徒の中に折れない心を育てること
です。生徒と話していると、「良い高校、
良い大学に入り、有名企業に就職し

仕事の仕方もさまざまですが、尊敬
の念を持って一緒に仕事をするこ
と。社会人としてそんな当たり前の
ことも、自分の失敗を経て、やっと
出来るようになりました。

ないと駄目だ」という価値観があま
りにも強いと感じます。そう思えば
思うほど、そうではない他者を認め
られませんが、自分がその通りに行
かなかつた時には、自分をも認めら
れなくなってしまう。

実は、私は大学卒業後、一般企業
に就職したのですが、肌合わずに
退職。その後、劇団の養成所に入っ
たのですが、生計が成り立たず、通
信教育で免許を取得して29歳で教員
になりました。そんな私自身の経験
もあり、生徒にはさまざまな生き方
があり、そのどれもが素晴らしいこ
とをもっと知ってほしいのです。

生徒に話を聞かせたいと思う著名
人の講演会を開いたり、「文京寺子屋
」として社会人を6人ほど招いて仕事
の話をしてもらったりしました。次
年度以降も、講演会や職業体験など

を開く予定です。そして、卒業時に、
生徒一人ひとりが3年間で心に残つ
た人にお礼の手紙を書く取り組みを
しようと考えています。自分は家族
や友だち、先生を始め、多くの人に
支えられていると実感できたら、つ
らい時にもくじけない心が育まれる
のではないかと考えています。

もちろん、社会で求められる力と
して学力向上も重要です。今年は新
課程全面実施の初年度ということも
あり、授業改善に着手しました。今
まで自分で作った教材を新課程に合
わせて手直ししたり、音読を取り入
れたりしています。

もちろん、社会で求められる力と
して学力向上も重要です。今年は新

挑戦したいことはたくさんありま
すが、それに埋没して生徒との時間
が減ることだけはないよう、優先順
位を付けながら、日々生徒と向き
合っていきたいと思っています。

連絡事項は必ず文書に

穂田先生の取り組み

◎学年会のレジュメ、行事進行表、実施要綱などを詳細に記した書類を作成し、学年会で共通理解を図るようにしています。「細かすぎるのでは」と言われたこともありますが、口頭だけでは生徒への指示が統一できず、進行が途切れてしまうことがあったので、必ず作るようにしています。



職場訪問を行った際には、①全体の実施要綱、②事前・事後学習を含めた学習計画表、③職場訪問当日の流れと注意事項の3つの書類を作成し、周知した。

2012 Vol.3 特集「『自律的な学習者』を育てる学び方指導」へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎日頃から必要だと考えていた「学び方指導」を特集していただき、感謝します。学級活動で扱ったり、年度始めの授業開きで学習法について説明したりしましたが、学校で組織的に行ったことがなく、大いに参考になりました。キャリア教育の視点と重なる部分が多いと感じました。

[島根県／T中学校／H・M]

◎本校でも学習の手引きを活用していますが、特集で指摘されていた通り、学習規律や予習・復習の重要性などにとどまり、学習方法の明示までには至っていない教科が多くあります。それは、教師の側も、効率よく効果的な学習方法とはどのようなものかを理解していないからではないでしょうか。

[新潟県／Y中学校／K・T]

◎床勝信先生が発行する「数学通信」は、授業で説明しきれなかった内容を補足するツールとして有効であり、担当教科で取り入れたいと思いました。また、対談の中に「認知心理学では他人が理解できるように説明できて、はじめて自分が理解できたと考えます」とありました。まさにその通りなのですが、授業で生徒全員に合った場面を設定するのは本当に難しいので、具体例がほしいと思いました。

[東京都／O中学校／A・T]

◎学習規律は非常に重要であり、本校の校区にある2つの小学校では、前年度から「学習の基本」として、ほぼ同一の学習規律を示しています。学力向上の最も基本となる土台は安心して学べる学習環境です。その環境をつくるには、何よりも小学校1年生からの指導が重要と考えます。その基盤の上に「学び方」を学び、自律的な学習者を育てたい。多様な生活環境の生徒が混在する大規模校には必須の事項です。

[新潟県／K中学校／S・K]

◎今日、学力低下の中でも学習意欲の二極分化が最も重要な課題であり、一刻も早く、授業において生徒の主体的な学びをつくるのが求められています。その鍵を握っているのは、指導者の学習観、授業観の改善にほかなりません。その授業づくりのヒントが、今回の特集に盛り込まれていると感じました。対談ではその理論的な部分が示され、岐阜市立東長良中学校の記事には具体的実践手法が示されていました。学び合いでの工夫は本校の研究と合致するので、早速、研究担当者に記事を紹介しました。本校は小中一貫校なので、学び方指導は小学校との系統性を考えながら組み立てることも重視したいと考えています。

[大阪府／T中学校／M・S]

ご両親を亡くされた
お子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、ベネッセの通信教育サービスが全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください

<http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/>

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ中学講座 0120-929-100 (通話料無料)

*一部のIP電話からは042-679-8565へおかけください (通話料がかかります)

*受付時間10:00～21:00 (日曜・祝日・年末年始を除く)

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。

日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。

だからこそ、我々も全力で

先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。

『VIEW21』は、これからも

全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、
今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター 『VIEW21』編集部

編集後記

「1年生は、まず教師や先輩、仲間とのかかわりを通して中学生としての『型』を身に付けることが必要。ただし、その過程で受け身にならず、1年生なりの主体性をもっと伸ばせないか」——今回の特集は、こうした先生方の課題意識から始まりました。3校の取材を通して「教師と生徒の信頼関係を築くこと」「自己肯定感を自己有用感にいかに変えていくか」の重要性を勉強させていただきました。(佐藤)

VIEW21 中学版 2012 Vol.4

2013年2月20日発行 / 通巻第316号

発行人

新井健一

編集人

谷山和成

発行所

(株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

印刷製本

凸版印刷(株)

編集協力

(有)ペンダコ

執筆協力

中丸満、山口慎治

撮影協力

荒川潤、川上一生、南弘幸

イラスト協力

カモ、幸剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

〒206-8686

東京都多摩市落合1-34

電話 042-311-3391

色とりどりの学びの情景

1つの目標に向かって



表紙の学校 福岡県福岡市立長尾中学校



葦の家の人たちと生徒会役員とで記念撮影。「たくさん集めてくれてありがとうと言われてうれしかった」と生徒会の1人は振り返る



集まったアルミ缶やプルタブの総重量は402kg。生徒と教師が協力して汚れた缶がないかを確認し、小さくつぶして葦の家に運ぶ

クラスごとにポスターを作り、協力を呼び掛ける。個人の集めた数を一覧表にするクラスもあった



アルミ缶19,475個、プルタブ77,199個。これは、福岡市立長尾中学校が9月に行ったアルミ缶・プルタブコンクールで集まった数だ。隣接する福祉施設、葦の家の活動に役立ててもらおうと毎年アルミ缶を収集していたが、一部の生徒のみの参加で収集量が芳しくなかった。そこで、生徒会が全校生徒から意見を募集。アルミ缶だけでなく、持ち運びのしやすいプルタブの収集が提案され、目標をアルミ缶1人30個、1クラス

1,000個とし、優秀なクラスを表彰することになった。

各クラスは1位を目指してポスターを作成し、開催中は毎日、給食時にクラスごとの収集量を放送で発表。保護者や教師にも活動は広まり、結果、過去最高の収集量となった。「みんなで力を合わせて目標を達成したことで、学校として一つ成長できた。来年は今以上の成果を目指せると思う」と生徒会長。学校一丸となって成し遂げた経験が更に高い目標へと誘っていく。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2012

Vol.3 「自律的な学習者」を育てる学び方指導

Vol.2 主体的な進路選択 —自らの意思と責任で決める力を育てる

Vol.1 「思考力・判断力・表現力」を評価し、育てる

2011

Vol.4 「中学生にする」導入期指導の工夫

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://benesse.jp/berd/> または で

2013年度 Vol.1 は 5月中旬発行(予定)です